

An aerial photograph of a mountain landscape. The mountain is covered in dense green forest, with patches of autumn-colored trees in shades of orange, red, and yellow scattered throughout. Large, light-colored rock formations are visible on the slopes. At the base of the mountain, a traditional Japanese building with a dark, tiled roof is nestled among the trees. The sky is a clear, pale blue.

# 中山仙境（夷谷）名勝調査報告書

豊後高田市教育委員会



春の中山仙境



夏の中山仙境



秋の中山仙境



冬の中山仙境



中山仙境 高城から見える岩峰群



霊仙寺（左）と実相院（右）



六所神社（中世・夷石屋の中心）



中山仙境 無明橋



隠れ<sup>うと</sup>洞穴



夷谷八景 楽庭櫻花



夷谷八景 高城秋月



梅ノ木磨崖仏



西夷から見える折り重なる岩峰



## 例 言

- 1、本調査報告書は、中山仙境（夷谷）の意見具申に伴い作成した。
- 2、文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（平成28年3月、以下『文化庁報告書』）で報告された「夷耶馬と夷山」について、国指定名勝への意見具申に伴い、名称を「中山仙境（夷谷）」とする。
- 3、『文化庁報告書』以外に参考とした文献・史資料は、最後にまとめて記す。
- 4、中山仙境（夷谷）について、平澤毅氏（文化庁文化財部記念物課）、飯沼賢司氏（別府大学教授）、越智淳平氏（大分県教育庁文化課）、山路康弘氏（大分県教育庁文化課）にご指導、ご助言をいただいた。
- 5、本調査報告書の編集及び執筆は豊後高田市教育委員会の松本卓也が担当した。
- 6、本調査報告書に使用した現況写真は、豊後高田市教育委員会が撮影・収集したものや、『文化庁報告書』作成の際に大分県教育庁文化課が撮影したもの、大分県の文化財魅力度アップ事業でまとめた豊後高田市教育委員会編『六郷満山寺院群詳細調査報告書』（平成28年3月）の中で撮影されたものを使用した。また、航空写真については、豊後高田市耕地林業課が、GIS開発用に撮影したものを使用した。

## 目 次

### 第1章 中山仙境（夷谷）と周辺の環境

- 第1節 自然的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11  
    〈地理的特徴／地形・地質的特徴／周辺の植生〉
- 第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13  
    〈中山仙境（夷谷）の歴史的環境／六郷山夷石屋の成立と展開／「中山仙境」の誕生／  
    六郷山の再興と板井派仏師の活躍／高井八穂の夷谷八景〉
- 第3節 民俗的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17  
    〈仁聞菩薩による開基伝説／夷里神楽／地域の伝承（隠山軍談・兄弟割石・鬼ヶ城伝説・六  
    本杉・吉田光由と稽古庵）〉
- 第4節 社会的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 第5節 これまでの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

### 第2章 中山仙境（夷谷）の概要

- 第1節 中山仙境（夷谷）風致景観の歴史的変遷・・・・・・・・ 21  
    〈六郷山夷石屋の発展と夷谷／東夷・中山仙境／霊仙寺周辺〉
- 第2節 主要な構成要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23  
    〈範囲全体／夷谷八景（楽庭櫻花・藤谷藤花・夷川螢火・高城秋月・大平峯雪・車橋夜雨・  
    霊仙晩鐘・六所宮燈）／中山仙境（磨崖五輪塔／虎御前宝篋印塔／無明橋／高城／馬の背  
    ／隠れ洞穴）・東夷（霊仙寺／実相院／六所神社／霊仙寺旧墓地／蛭子社／焼尾阿弥陀堂  
    ／焼尾塔ノ本国東塔／祇舎不動／高岩／藤ヶ谷／一望岩／石河内溜池）・西夷（線彫板碑  
    ／梅ノ木磨崖仏／鬮見社／兄弟割石／猿田彦大神像庚申塔／板井春哉石像）・前田（平治  
    橋／楽庭神社）・周辺の景観（一路一景公園／小牟礼山）
- 第3節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

### 第3章 中山仙境（夷谷）と豊後高田市

- 第1節 名勝としての中山仙境（夷谷）の意味・・・・・・・・ 30
- 第2節 一路一景公園の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
- 第3節 保存活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

- 参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

## 資料編

①市内位置図	33
②中山仙境（夷谷）周辺文化財	34
③夷地区小字図	35
④河川の名称	36
⑤中山仙境（夷谷）範囲図	37
⑥瀬戸内海国立公園範囲・ 国東半島県立公園範囲図（該当地区抜粋）	38
⑦字図	39
⑧字図（所有者別）	40
⑨一路一景公園講演から見た岩の名称を示す図	41
⑩構成要素の位置図（航空写真）	42
⑪六郷山夷岩屋の寺社境内平面図	43
⑫中山仙境 峯道及び岩屋・霊場位置図	44
⑬夷地区・中世地名位置図	45
⑭周辺地域の関連文化財・地名	46
⑮仏師・板井氏系図	47
⑯中山仙境（夷谷）に関する文献等	48

## 写真編

A 現況写真	51
B 古写真	67
C 周辺写真	76

# 第1章 中山仙境（夷谷）と周辺の環境

## 第1節 自然的環境

### ○地理的特徴

夷谷は、豊後高田市北部に位置する旧香々地町域の奥に位置する谷である。夷谷は東夷・西夷に分岐しており、その中央を縦断する岩峰群を「中山仙境」と呼ぶ。この「中山仙境」のうち、最も標高の高い「高城」は316.9m、登山口は65mであり、それほど高低差はないが、高城付近の痩せ尾根に出れば、周辺に岩林が競い聳える景色が広がる。中山仙境には中世以来、多くの霊場が設けられ、六郷山寺院の峯入りのルートにも組み込まれている。切り立った崖に峯道を形成する「馬の背」や、空中の岩をわたす「無明橋」などの難所も多い。当地に大師信仰が伝わって以降は、霊場巡りが行われるようになり、峯道の至る所に弘法大師や観音菩薩の石仏が安置される【資料⑫の地図参照】。

東夷に整備された一路一景公園から見える岩林は50～80m程度垂直に聳えており、その外見的特徴から窓岩、大仏岩、白岩、烏帽子岩、七福岩などと呼ばれる岩峰が並んでいる【資料⑦】。また、東夷の後背から国東市との境にかけても岩峰が連なって、南北に幾本も伸びる岩峰が重なり合い、それらは一帯をなして、奇岩霊窟の一群を成す。こちらにも不動岩・くじら岩・高岩といった呼び名の付いた岩峰が多数見られる。一帯の風景は、耶馬溪を髣髴とさせるものとして、しばしば「夷耶馬」とも称される。

東夷は六郷山寺院「夷石屋」の坊の1つが寺院化した霊仙寺・実相院、そして、それに隣接して六所神社が並んでおり、霊場の拠点となっている。先述の南北に伸びる岩峰を後背に持ち、その間に生じる僅かな谷地には、かつて水田や畑が拓かれていた。そこには平安時代から六郷山僧が住んだ坊や、開発した小規模な耕地「払」があったことが史料や小地名から推定できる。豊後高田市と国東市の境には屏風のような岩壁が聳えているが、払が設定された細い谷筋につくられた細道を辿って峠を越えることができる。こうした歴史的背景から、東夷では集落の家屋のほとんどが谷の北東側に建てられているという特徴がある。

西夷でも主に中山仙境とは反対側に集落が広がっているが、中山仙境側にも家屋は見られ、梅ノ木・小野迫・横岳といった地区では、中山仙境側に切り開かれた土地に集落を形成している。西夷でも谷の両側に風致優秀な岩峰群を持ち、東側には中山仙境とその奥に東夷後背の岩峰の一部を一度に望むことができる。西夷にも「夷石屋」の領域が広がっていたことが分かっており、梅ノ木磨崖仏・道園線彫板碑といった優れた中世の石造文化財が見られる。

東夷と西夷を繋ぎまとめるように聳えるのが中山仙境であり、東西夷の文化にも大きな影響を与えている。東西夷には中山仙境に向けて墓地や神社がつくられ、中山仙境を神聖視する文化が育まれてきた。東西夷にそれぞれある「兄弟割石」は、中山仙境の地下で繋がっていると伝えられている。東西の夷谷は中山仙境によって風景・文化の面で“対”の存在へとなっていたのである。これは当地域の地理・地形によってもたらされた夷谷最大の特徴といえる。

## ○地形・地質的特徴

夷地区は、国東半島北部（旧香々地町・国見町）まで伸びる豊肥・瀬戸内火山岩類凝灰角礫岩の地質に分類され、耶馬溪層と称される凝灰角礫岩層の侵食により屹立した岩峰が連続する風景が見られる地域である。両子山系の安山岩質の凝灰角礫岩の侵食によって形成された開析谷に、蛇行する竹田川が狭い沖積地を作り出す谷の地形であり、当地域はしばしば夷谷と呼ばれる。こうした地形を活かして六郷山寺院の研究で言う「横長の伽藍配置（谷川に沿って伽藍や坊が横長に伸びる伽藍配置）」の典型寺院の1つである夷岩屋が谷全体に形成されていった。

凝灰角礫岩によって形成された崖面は、侵食されることによって、角礫層が厚い箇所が相対的に残り、急崖や痩せ尾根を作り出し、その表面にも礫が多数露出して、不規則な形状と荒々しさを持っている。また、凝灰角礫岩の密度のムラによって生じる、穴状・室状に抉れた箇所や、不規則に削れた箇所が多数見られ、山岳仏教の栄えた六郷満山において、修行場としての傑出した風景（岩屋・無明橋）が生み出される要因となっている。

中山仙境は50～80mほど垂直に聳える岩峰を形成し、航空写真等で確認すれば尾根が複雑に入り組んでいることが分かる。中山仙境の中央に伸びる尾根を渡る道に加え、時折左右にそれた尾根道の先に眺望に優れた露頭が多く見られるのが特徴である。

東夷の東側にも数十m級の岩峰が多数存在するが、中山仙境に比べると規則的に筋をなして多くの細谷を形成している。この細谷を利用して、古代から中世にかけては、祇舎・住連・根本・藤ヶ谷・善華などに岩屋を持つ霊場が形成された。

西夷の西側の岩壁の特徴としては角閃岩を含むやや白色がかった安山岩が見られることである。同質の角閃安山岩は国東半島では田染・大田地区などでよく見られ、石造文化財などにもよく使用されている。西夷の岩壁では安山岩質の岩石によく見られる板状節理がよく見え、薄く剥がれた石片が周囲に散乱している。こうした薄い石片を利用した土地の造成は、六郷山寺院ではよく見られ、夷谷でも霊仙寺旧墓地などに見られる。

夷地区は東西に聳える岩峰の更に外側をメサ式の山に囲まれている。南側の<sup>はじかみさん</sup>薑山、<sup>こむれさん</sup>小牟礼山や、東側の<sup>くろきさん</sup>黒木山といった山々は、比較的低い箇所にある夷谷からは高山のように見え、周囲の風景と一体に捉えられる。特に小牟礼山は夷谷八景の1つ「大平峯雪」として親しまれている。

## ○周辺の植生

大分県の中でも国東半島は瀬戸内型気候域・旧火山地帯の植生が見られる。周防灘に面した地域は、年平均気温15℃、年間降水量は1500～1600mmであって夏季の雨量が少ない地域である。また冬季は周防灘を吹きぬける冬季北西季節風の影響でしばしば降雪をみる。

中山仙境（夷谷）の範囲を含む凝灰岩上は夏季の乾燥も加わって主にイブキシモツケーイワヒバ群落に属しており、ブゼンシモツケ、マルバアオダモ、キハギ、イワヒバ、ススキ、イタチガヤ、イガリヤス、ハマカンギク、コツクバネウツギ、シノブ、ブゼンノギク、カワラヨモギ、ヒオウギ、タカネマンネングサなどがまとまって生育している。また、夷地区に特徴づけられるものとしてイワシデ群落（イワシデ、マルバアオダモ、ホソバヒカゲスゲなどで構成される）があり、2009年の調査では4箇所のイワシデ林が確認されている。

中山仙境（夷谷）範囲内の丘陵地には、11月末～12月にかけて紅葉する植物が群生している。主にマルバアオダモ（赤）やイワシデ（黄）が見られ、更に常緑樹の植物群と混ざり合い、夷谷の峰々は3色で彩られる。

他にも春には山桜（4月頃）、初夏には山藤（5月頃）が咲き、夷谷八景において名所を定めており（楽庭櫻花・藤谷藤花）、これらについても夷谷の観賞上重要な樹木である。

また、夷地区ではイワギリソウ（湿度の高い岩壁等に着生する多年草。花期は5～6月。赤紫色の小さな花を散状につける。大分県の条例で希少野生動植物に指定されている。【大分県RDB（I A）】）も見られ、宇隠山の岩壁に群生地があることが報告されている。

他にも、マツバラシ（岩壁などに着生する常緑性のシダ植物。根と葉が未分化の原始的な種で、個体数は少ない。国東半島県立自然公園の保護状況の確認のために行われた1999年の調査では、夷地区で発見されている。【大分県RDB（準）】）や、ブゼンノギク（耶馬溪をタイプロカリティとする二年草。日当たりの良い岩場に着生し、10～11月に舌状・薄紫色の花を咲かせる【大分県RDB（準）】）など、夷耶馬の岩場に適応した珍しい植物を見ることができる。

コケ類では日当たりのよいイブキシモツケ・イワヒバ群落の範囲では、高温かつ乾燥した環境の中、ウスイロキクバゴケが岩場に張り付き、ケギボウシゴケが降雨とともに範囲を拡大して繁っている。急斜面では僅かな土壌に張り付くようにハナゴケ・スナゴケ群落があり、ハナゴケ、スナゴケ、ウメノキゴケ、イワカラタチゴケなどによって軟らかい球体状にフローラを形成している。

東夷の国東市との境界付近では、1999年の調査で天然性のクヌギを含む、クヌギ・ノグルミ群落（クヌギ、ノグルミ、コナラ、ケヤキ、アキニレ、コバノタツナミなど）が発見された。日本列島において、クヌギは縄文時代より燃料や食糧に利用されてきたが、その殆どは中国大陸から持ち込まれ、植樹されたものであると知られている。大分県・国東半島はシイタケ栽培のホダ木のためのクヌギ造成林の面積の広さで知られるが、天然性のクヌギはほとんど知られていない。東夷のクヌギ林では、胸高幹囲が80cm（樹齢100年以上）を超える巨大なものが多く、斜面や岩体に根を張って生育しており、人為的なものがほとんど加えられていないと言える。

## 第2節 歴史的環境

### ○中山仙境（夷谷）の歴史的環境

豊後高田市は豊後国の北東に位置し、瀬戸内海に向けて突き出た国東半島の西側に位置している。国東郡の六郷の内、来縄郷・田染郷・伊美郷の一部に含まれると考えられており、大分県立歴史博物館の国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査や、豊後高田市等の遺跡発掘調査によって、多数の縄文～弥生時代の集落遺跡が調査された他、猫石丸山古墳・入津原古墳・真玉大塚古墳・岬古墳といった古墳群、上野条里・荒尾払田条里・川原条里といった条里遺跡、カワラガマ遺跡・富貴寺遺跡・天念寺遺跡といった寺院遺跡の存在と意義が明らかにされていった。

沖積地や盆地に広がる水田は、後に宇佐宮やその神宮寺・弥勒寺の荘園へと成長していく。市内では、田染荘・来縄郷が宇佐宮領、都甲荘・小野荘・草地荘・真玉荘・香々地荘が弥勒寺領として成立し、各地域の歴史的景観の基礎となっている。その一方で、条里や荘園として発達できなかった半島の中心部の狭隘な地域には、六郷山僧による小規模な開発が積み重ねられ、「払」と呼ばれる小規模な田畠や「坊集落」がつくられていった。

国東半島では「切り払う」の意から小規模な耕地の地名に「払」という字が多用され、多くの地名が現在地名ともリンクする。鎌倉時代後期のものと推定されている「別当并院主分田町坪付注文」などによれば、禅坊払・徳万坊払・圓徳屋敷払といった坊跡や屋敷跡に由来する「払」、利

乗房弘・常智房弘といった開発に関わった人物に由来する「弘」、鍛冶迫弘・小垣原弘・屋気尾（焼尾）弘といった地形・地名に由来する「弘」などが多数存在していたことが分かり、中世の六郷山夷石屋の開発が大きく進展していたことを掴むことができる。

平安時代に行われた夷石屋の寺領形成の過程は、<sup>だいきぼう</sup>大力坊の故地でもある<sup>ながおの</sup>長小野村の庄屋・<sup>よせ</sup>余瀬家に伝来した『余瀬文書』（平安～江戸時代、大分県指定文化財・宇佐市在住の個人蔵）によって明らかにされた部分も多い。『余瀬文書』中には、夷石屋・坊跡に関連する地名が多数残されており、そうした「夷石屋」についての研究は六郷山寺院や香々地荘の調査とともに積み重ねられてきた。

中世に入ると武士の活動も多く見られる。戦国時代には大友氏の重臣である<sup>よしひろ</sup>吉弘氏の支配が夷地区にも伸張し、その被官として夷石屋大力坊付近を本拠とする大力氏の名が見られる。吉弘氏は屋山の院主や六郷山別当職を占め、各寺院への寄進・修理を行っていたことが明らかにされており（「六郷山年代記」など）、吉弘統幸の願文が霊仙寺に伝わっていたことなどから（『三重郷土誌』）、夷石屋に関しても手厚い保護の政策を講じたと考えられる。

夷地区を含む旧香々地町・真玉町の範囲のほとんどは、江戸時代前期に豊前竜王藩・幕領・日田代官所領を転々としたが、元禄期よりは延岡藩の飛び地として編入された。各藩に分割されたことにより、六郷山寺院の信仰は分断され勢いを失ったが、その一方で国東半島には信仰の多様性が見出され、真言系（四国八十八箇所霊場・日出蓮華院系の地藏信仰）・修験道系・三十三観音霊場といった巡礼文化を生み出す素地となっていた。

## ○六郷山夷石屋の成立と展開

六郷山寺院の成立については不明確な部分が多いが、夷谷に拓かれた夷石屋については、長小野村の庄屋に伝わっていた『余瀬文書』によって成立に関わる経緯を垣間見ることができる。中でも六郷山最古の史料である「<sup>えびすじゅうそうぎょうげんげじょうあん</sup>夷住僧行源解状案」（長承4（1135）年）は、その開発に深く携わった<sup>じゅうそうぎょうげん</sup>住僧行源が、仏事の傍ら少しずつ切り開いた<sup>でんぼく</sup>田畠の領有を、<sup>まんざんだいしゅ</sup>満山大衆の御判により承認されようとしたものである。行源は、平安時代の夷地区を「<sup>だいましよ</sup>大魔所」と表現し、大小樹木が繁り、人跡が絶えるところであったと伝えている。開発した領地の<sup>しいし</sup>四至に見える「<sup>ぎしや</sup>耆闍谷」は、現在の小字「<sup>ぎしや</sup>祇舎谷」を含む一帯であると考えられる。この文書からは、当時の夷石屋に六郷山の<sup>だいしゅ</sup>大衆<sup>せんぎ</sup>僉議に参加できる有力な住僧が他に6人いたことも分かり、平安期の六郷山の実態が如実に伝わってくる。

古代～中世における夷石屋の境内は非常に広大であり、現夷地区に加えて、隣接の長小野地区のほとんど（大力坊跡とされる行者窟や、平安仏が多数旧在した今井薬師堂など）が境内地であったとされる。現在でも坊跡を示す地名が多数残されている【資料⑬の地図参照】。

平安時代における夷地区での僧侶達の活動がいかに活発であったかを示す文化財も多く残っている。後に夷石屋筆頭の坊へと成長してゆく<sup>こんほんいん</sup>根本院（後の霊仙寺）には、平安時代の遺産として阿弥陀如来坐像が祀られている。他にも夷石屋の講堂があったとされる六所神社には、旧境内の本殿とされる今夷社に6軀の平安仏、奥ノ院にも平安仏と思われる風滅仏が数軀安置されている。更に夷石屋の末寺である焼尾岩屋（現、焼尾阿弥陀堂）にも、平安期の木造阿弥陀如来立像【市指定有形文化財】が祀られている。石造文化財でも、長小野地区字石仏に平安～鎌倉時代の阿弥陀如来石仏や、東夷坊中にも同時期の石造宝塔（1基と塔身部材等）が岩屋の中に残されている。

## ○「中山仙境」の誕生

中山仙境の「中山」とは、東西夷の中間に聳えることからそう名付けられたといい、鎌倉時代の古文書には既に政所坊の所領として「中山屋敷」「中山田」という記載が見え始め、永正4(1507)年の「六郷夷山小牆原名四至証状」において小牆原名の四至として登場している。

「中山」は古くより六郷山の修行場であったとされ、神聖な場所として夷石屋の住僧達からの崇敬を集めるようになる。それを物語る史跡として、霊仙寺旧墓地(中世～近世中頃までの墓地)

【県指定史跡(六郷山夷岩屋の寺社境内の一部)】、梅ノ木磨崖仏【県指定史跡】などがある。霊仙寺旧墓地では中山に向かって墓地が拓かれており、扁平な石を利用した石垣の積み上げ方から中世から江戸後期にかけて徐々に平地が造成されていったと考えられている。霊仙寺旧墓地の磨崖五輪塔十数基、磨崖連碑3基(いずれも安土桃山時代頃)、梅ノ木磨崖仏や中山仙境登り口附近の磨崖五輪塔は中山の岩壁を削って作られている。

江戸中期には霊仙寺僧と思われる権大僧都真如院が享保20(1735)年に建てたとされる虎御前宝篋印塔【市指定有形文化財】が露頭の上に作られ、四国八十八箇所霊場や三十三観音霊場の場として中山に多くの霊場が拓かれ、「中山仙境」と呼ばれるようになった。中山仙境の史料上の初出は『西国東郡誌(大正12年)』である。

中山仙境の峯道のコースの概要を説明する。前田地区の登り口から峯道をしばらく歩けば、岩峰の切り立った尾根に出る。そこから尾根伝いに進み、無明橋(「拝み合わせ」による石造桁橋)、馬の背(切り立った痩せ尾根)といった難所を越え、その後は岩場の細道を下り、深い岩屋に拓かれた霊場「隠れ洞穴」などを回って降り口に至る。

「中山仙境」の語は大正12年の『西国東郡誌』が管見の限り初見であるが、その後「中山仙峡」と併用する時代が続き、『広報かかぢ』を紐解けば昭和40年代頃から「中山仙境」の標記になってゆく。

## ○六郷山の再興と板井派仏師の活躍

近世になると国東半島は、島原藩・延岡藩・杵築藩などに分割され、それに伴い六郷山寺院の繋がりも途絶え、一時的に力を失った。夷石屋も、江戸最初期には小倉藩の支配を受けたが、すぐに杵築藩の支配を受け、一時天領に編入された後、正徳2(1712)年に延岡藩の預かりとなった。いずれの支配の時代にも、夷石屋は領主による確かな保護を受けることができずに寺領は縮小の一途を辿ったが、宝永7(1710)年には夷村村長の隈井吉連によって霊仙寺が再興された。その後、享保2(1717)年には、霊仙寺の隣に実相院が再興された。およそこの時期に現在の寺社境内の構成が完成したといえる。

江戸中後期になると、夷地区では特色ある僧侶達の活動も見られるようになる。西夷の出身とされる板井氏一族は、元は大友氏の家臣であったと伝えられているが、国東半島を代表する仏師としての活躍が見えるようになる。系図によれば、南北朝時代に足利尊氏とともに板井成貞が、夷に来住したとあり(第3節 民俗的環境「六本杉」の項を参照)、その後数代が欠けている。戦国時代以降は、式部大夫を名乗り、形代様(谷ノ迫磨崖仏【市指定有形文化財】)や醐峴宮(西夷)を奉祀する神職に代々就いていたと注記がある。江戸中期には、板井氏一族はいくつかの家に分かれ、東西夷で仏師・石工として活動するようになる。

板井氏は比叡山から法橋位に叙された人物を多く輩出し(利三郎国良・林三郎国政・徳四郎国吉・益二郎・甚蔵国俊・定四郎国光・泰助国安・春哉【資料⑩参照】)、その作品は夷地区にとど



まらず、豊後高田市に多数残されている。東夷では霊仙寺境内にある九州最大の一石地藏石仏【国良・国政・国吉作、市指定有形文化財】、石造仁王像【国良・国政作、市指定有形文化財】をはじめ多くの石仏を残している。一方の西夷では、猿田彦大神画像庚申塔【板井判蔵（甚蔵の父）作の銘・市指定有形民俗文化財】、<sup>えびす</sup>戎橋【春哉ら作、市指定有形文化財】、平治橋【春哉ら作】などの制作に関わっている。

特に平治橋の建造に尽力した春哉は、本市加礼川の長安寺所蔵「木造太郎天及び二童子立像【国指定重要文化財】」の修理に携わり、胎内銘を発見したり、長安寺鬼会面を作成し、天念寺修正鬼会で使われる鬼会面の系譜の祖になったりしている。医者、教育者としても知られ、西夷地区には春哉の弟子達により、石像が建てられている。

### ○<sup>たかいやつほ</sup>高井八穂の夷谷八景

文政2年（1819）に、国学者・高井八穂が、板井某の求めにより「夷谷八景」を定めたということが分かっている。この年は頼山陽が耶馬溪を「耶馬溪山天下無」と賞した翌年であり、両豊の岩峰の景色の再評価が進んだ時期である。高井八穂に八景の選定を依頼した板井氏も、恐らく耶馬溪を強く意識していたと想像される。

高井八穂（生没年不詳）は、<sup>ひのすけき</sup>日野資枝に師事した歌人・<sup>のりかぜ</sup>高井宣風（1743-1832）の子で、国学を志して本居宣長に師事し、古典和歌の分析を行った人物として著名である。代表的著作『古詞類題和歌集』や『類題名家和歌集』では、あらゆる古典和歌を蒐集して、春・夏・秋・冬・恋・雑に分類し、江戸派と呼ばれる父・宣風らの作品と古典和歌を並べて比較している。また、『今古仮名遣』では古典和歌に使用される仮名遣いをイロハ順にまとめたものである。どちらも古典和歌研究の草分け的存在であったと評価される。同じく古典和歌を研究した<sup>ちかげ</sup>加藤千蔭、<sup>はるみ</sup>村田春海とも親交が深く、八穂は化政期の歌学界を牽引した1人と言えるだろう。

夷谷八景は「<sup>がくわおうか</sup>楽庭櫻花」「<sup>ふじがたにとうか</sup>藤谷藤花」「<sup>えびすがわけいか</sup>夷川螢火」「<sup>たかじょうしゅうげつ</sup>高城秋月」「<sup>おおひらほうせつ</sup>大平峯雪」「<sup>れいせんばんしょう</sup>霊仙晩鐘」「<sup>くるまばし</sup>車橋夜雨」「<sup>ろくしよきゆうとう</sup>六所宮燈」のことで、八穂がそれぞれを歌枕に和歌を詠んでいる（詳細は第2章 第2節 主要な構成要素 中の夷谷八景の段を参照）。そして、それを類題として様々な和歌・連歌が詠まれており、高井宣風の歌もあわせて地元に伝わっている。

- |       |                              |    |
|-------|------------------------------|----|
| ○楽庭櫻花 | 祝子が立ち舞ふ庭の櫻花いくよの春のかざしなるらむ     | 八穂 |
|       | のどけさに神もここやうかれけん庭櫻花ちりにまじりて    | 宣風 |
| ○藤谷藤花 | 角ぬさはふ岩根を越えて名ぐはしく花咲かかる谷の藤波    | 八穂 |
|       | 松山をこさじといひし言の葉も思ひぞ出る谷の藤波      | 宣風 |
| ○夷川螢火 | 夷川すだく螢のかげを見てまたしらぬ火とおもいけるかな   | 八穂 |
|       | 川つらにもゆる螢をみしらずやいづこのえみし名をながしけん | 宣風 |
| ○高城秋月 | さやかなる光りや代々にましらなく高城の山の秋の夜の月   | 八穂 |
|       | （宣風の歌は伝わらず）                  |    |
| ○大平峯雪 | ふりつもる雪にうもれて岩角も平らに見ゆる峯のかよい路   | 八穂 |
|       | 月きよみ高城の山のもみぢ葉を夜の錦とたれか見るべき    | 宣風 |
| ○車橋夜雨 | 橋の名にかけつゝ夜半の雨音をしのび車の寄るかとおもふ   | 八穂 |
|       | 橋の名の車の音かとゞろきて夜半の村雨神なりわたる     | 宣風 |
| ○霊仙晩鐘 | 世の中のほかの住家にいかばかりよし婆蘇山の入相の鐘    | 八穂 |

山寺の入相の鐘音せずば芝刈る敏鎌柄も朽ぬべし 宣風

○六所宮燈 やはらくる光をよゝに見するかな六つの宮居の夜半のともし火 八穂

燈火をかゝけて夜もあふがるゝ神やしつまるまもなかるらん 宣風

八景それぞれの所在した場所は全て特定できたが、藤谷藤花・車橋夜雨・六所宮燈については、風景が当時から大きく変化してしまっている（宇藤ヶ谷では現在も山藤が咲くが観覧できる場所は廃れている。車橋は取り壊され親柱1本が道脇に置かれている。六所宮燈は文化年間の燈籠が1基残っており、油受けの鉄皿も置かれているが現在では火を灯すことはない。）。

### 第3節 民俗的環境

#### ○仁聞菩薩による開基伝説

六郷山寺院の成立には仁聞（菩薩）の開基伝説がある。養老2（718）年に八幡神の応現でもある伝説的僧侶・仁聞が、国東半島の28の谷々にそれぞれ寺院を開き、69,000 軀の仏像を造作したとされるもので、仁聞は六郷山寺院の信仰の中心として極めて重要な存在である。六郷山寺院に残る平安仏や大型の仏像・磨崖仏の多くは仁聞作と伝えられ、霊仙寺では平安時代の木造阿弥陀如来坐像、鎌倉時代の木造千手観音立像、六所神社の6 軀の平安仏などがそれぞれ仁聞作と伝わる。

六所神社には仁聞菩薩をかたどったとされる磨崖像（室町時代の作と推定される）が2ヶ所ある。門の右手にある像は、像容から元々磨崖仏（地藏菩薩及び比丘・比丘尼像カ）として彫られたと思われるが、現在は中央に八幡大菩薩（仁聞）・左右に男女神の3柱の磨崖像として信仰されている。一方、奥ノ院の岩屋につくられる磨崖像は、僧形で合掌している姿で表現され、下部には納経のためと思われる横長の孔が穿たれている。仁聞の像を信仰の対象としている寺院は六郷山でも少なく、夷石屋以外では長安寺（豊後高田市、江戸時代の肖像画がある）、両子寺（国東市、江戸時代の木像がある）くらいである。

#### ○夷里神楽【市指定無形民俗文化財】

国東半島の神社の祭礼ではよく神楽が舞われる。中でも六所神社へ奉納される夷里神楽は、子孫繁栄・五穀豊穰を祈る重要な祭事として今に伝わっている。夷里神楽に関する史料は古く、六所神社社司の記録によれば、少なくとも安永6（1777）年には奉納の記録がある。現在では4月に行われる春の大祭における演舞は、麦の収穫を前に行われるため「麦祈祷」と呼ばれ、盛大に執り行われる。神楽の舞台となる六所神社下宮（楽庭神社）は、江戸時代には既に桜の名所として知られており、夷谷八景の1つ「楽庭櫻花」の場面とも重なる。

国東半島北部における神楽の草分け的存在であったといい、見目神楽（香々地町見目）、有寺神楽（真玉町大岩屋）、竹田津神楽（国見町竹田津）に影響を与えたとされる。

夷里神楽は2部構成で23の演目からなり、前半が里神楽（1～10）、後半が岩戸神楽（11～23）になっている。岩戸神楽は伝統的な演目により、各地の神楽と共通性が高いが、里神楽は夷地区独自のもので、夷耶馬に代表される地区の風景や、長年で培われた神仏への信仰を神楽の演目に落とし込んだものである。中でも荒神は、地域で根強い発展を見せた庚申塔・猿田彦大神の信仰と結びつき、縁起が良い演目として人気がある。

○地域の伝承（隠山軍談・兄弟割石・鬼ヶ城伝説・六本杉・吉田光由と稽古庵）

・隠山軍談

中山仙境の峯道の終盤に位置する「隠れ洞穴」と呼ばれる岩屋には、黒田官兵衛・長政父子との抗争の末に滅ぼされた宇都宮鎮房の家臣達が身を隠したという伝説がある。隠れ洞穴の付近には、隠山軍談の内容と、主君を助けて戦った七丸（鬼丸・市丸・金丸・能丸・五郎丸・徳丸・次郎丸という、香々地から夷にかけて勢力を持った武士の総称）を称える石碑が建てられている。

【隠山軍談の概要】

宇都宮氏家臣の残党の一人、香々地出身の松成遠江守兼之は、戦いに敗れた後、旧知であった七丸を頼り、夷谷の「隠れ洞穴」に匿われた。

黒田官兵衛は、夷谷に宇都宮氏家臣の残党が落ち延びていることを知り、兵を差し向けるが、鬼丸宗綱・松成兼之・五郎丸高政・五郎丸忠虎らの活躍によって退けた。松成兼之や七丸は、隠山の存在を知られてしまったため、思いおもいに別れ、香々地の谷や、赤根の谷へ離散し、農民となって平和に暮らしたとされる。

・兄弟割石

東夷・西夷にはそれぞれ2つに割れた大岩があり、「兄弟割石」と呼ばれている。

東夷の割石は霊仙寺旧墓地の前面にあって、高さ8m、差し渡り14mの巨石で、頂上に江戸時代の宝篋印塔が建っている。古くは講堂があったとされる六所神社の対面に位置し、割石と宝篋印塔は境内からよく視認できる。墓標・石塔などの分類から霊仙寺旧墓地は中山仙境側から境内に向かって下るように展開してきたと推定されているが、割石は墓地と境内の境界としての機能も果たしている。

西夷の割石は小字「割石」の水田の中にある高さ9m、差し渡り13mの巨石で、伝承では兄弟割石は中山仙境の地下にあるという道で通じているとされ、一度中に入ってしまうと、出ようとした方の割石の割れ目が狭まり、二度と出られなくなってしまうと伝わっている。

地元では「東の割石が雉を喰えば西の割石は人を喰い、東の割石が人を喰えば西の割石は雉を喰う」というフレーズが今も語り継がれている。ある時、西の割石に人が落ち、外に出ることができずに死んでしまい、その墓標が大岩のすぐ傍に立てられたと言われている。

・鬼ヶ城伝説

夷地区では屹立する岩峰の地形を「○○城」と呼ぶことが多く（中山仙境の高城・石城、東夷の東城など）、東夷の石河内池の先の一帯の耶馬を「鬼ヶ城」という。

鬼ヶ城という地名は、鎌倉時代の刀匠・紀新大夫行平が籠もり刀作をした場所であったとされることに由来する。行平は後鳥羽院の御番鍛冶に九州で唯一選ばれ、豊後刀と呼ばれる刀剣の中でも最高峰のものを遺している（永青文庫所蔵の一振は国宝に指定される）。最大の特徴は刀身に施された彫刻であり、神像・不動明王・倶利伽羅竜などを施してあるものが多い（湾刀の刀身に彫刻を施したのは行平が最初と言われる）。

刀剣の歴史等をまとめた室町時代の書物『鍛冶名字考』によれば、行平が刀作する姿は「鬼神大夫」と呼ぶべき迫力があつたと記してあり、夷の山奥で槌を振るう行平の姿を見た人々が、一帯を「鬼ヶ城」と呼んだと伝えられている。

#### ・六本杉

東夷・六所神社の境内石段の前に並ぶ六本の神木（杉）を「六本杉」と呼び名所となっていたが、数百年の樹齢があった六本杉の勢いは昭和後期には衰え、昭和 53 年に 4 本、平成元年に 2 本、切り倒されてしまった。現在の六本杉は 2 代目となる。

六本杉は、京都での戦いに敗れ、一時九州に身を寄せた足利尊氏が植えたという伝説がある。海を越えた尊氏を迎えたのは、富来（現国東市）の富来忠茂と言われており、尊氏は夷・六所神社で戦勝祈願として六本杉を植樹し、宇佐神宮、博多へと兵を進め、多々良浜の戦いで菊池武敏を破ったとされる。

初代・六本杉の大半は売却されたが、その一部は夷地区にも残されている。六所神社の社務所にある衝立は、六本杉から取った一枚板でできている。他にも各家のテーブル等になっているものもあるという。

#### ・吉田光由と稽古庵

わが国最初の数学の教本とされる『塵劫記』を編纂した吉田光由が前田の谷口地区に塾・稽古庵を開いていたということが伝わっており、光由を泊めたとされる隈井家に旧在した光由の位牌と、『塵劫記』が香々地公民館で保管されている。確証の持てる史料は見つかっていないが、台林地区には、光由（無銘の墓）と京都から来た弟子の渡辺藤兵衛の墓（光由の弟子の銘有り）が残されている【市指定史跡】。

伝承によれば、光由は小倉藩・細川忠利に重用されていたが、年齢のせいもあって眼疾を患い、暇を貰って九州を巡ったとされる。その旅程で見た夷耶馬の景色を気に入った光由は、隈井家を頼り、夷に移り住み、稽古庵という塾を開いて、算術を教えたとされる。その後、稽古庵跡には、阿弥陀堂が建っていたことが分かっているが、現在では一字一石塔が 1 基と、石造物の部材が散在するだけになっている。

### 第 4 節 社会的環境

現在、中山仙境（夷谷）は、県指定名勝「夷谷」として保護されているが、保護すべき範囲が全て指定範囲に含まれているわけではない【資料①の周辺文化財参照】。また、霊仙寺・実相院・六所神社・霊仙寺旧墓地の範囲が県指定史跡「六郷山夷岩屋の寺社境内」となっている他、同じく県指定史跡として「線彫板碑（梅ノ木磨崖仏を含む）」がある。市指定の磨崖像が 3 箇所ある（六所神社磨崖像①、六所神社磨崖像②、谷ノ迫磨崖像）。指定範囲内には野外に石塔などの有形文化財が散在しており、焼尾塔ノ本国東塔【県指定】、霊仙寺地藏尊像【市指定】、霊仙寺仁王像①【市指定】、霊仙寺仁王像②【市指定】、霊仙寺国東塔【市指定】、実相院国東塔【市指定】、戒橋【市指定】、虎御前宝篋印塔【市指定】、道園宝篋印塔【市指定】がある。有形民俗文化財として、猿田彦大神画像庚申塔【市指定】がある。

文化財以外の保護では、瀬戸内海国立公園の追加指定の範囲の一部が含まれている（中山仙境及び東夷の一部）。国立公園の指定地外は、国東半島県立公園の指定地となっている。

東夷・鳥越には、大分県の事業で平成 3（1991）年に整備された展望所「一路一景公園」があり、各岩の名称などについてガイダンス機能（看板など）を持っている。

平成 7（1995）年には、町営の香々地町夷谷温泉が開業し、合併後は市に引き継がれた。

地元住民では、旧三重村（長小野・夷地区）の範囲で、地域文化を掘り起こすための団体とし

て「三重の郷」が、平成 27（2015）年に発足しており、地域振興に係る活動を行っている。

平成 27 年 3 月に開通した国東半島峯入りロングトレイルのコースの中では、中山仙境はコースの中に組み込まれていないが、東夷から藤ヶ谷を越えて、国東市国見町へと抜ける行程が保護すべき範囲に含まれている。中山仙境は旧香々地町時代よりトレッキングの名所として知られており、国内外から観光客が訪れている。

豊後高田市は過疎地域であり、市域全体で自然減による人口減が進んでいる。夷地区は市内山間部では老年人口が低い方ではあるが、三重小学校の廃校とともに加速度的に高齢化が進むと予想され、交流人口・移住人口の拡大は喫緊の課題となっている。平成 28 年度には、地域活性化のための組織「三重の郷」を立ち上げ、地域おこし・住民の活力創造に力をいれている。

中山仙境（夷谷）周辺への影響で見れば、第一に耕地の減少が挙げられる。特に西夷の奥にあたる小野迫・横岳付近の棚田は耕作者がいなくなり、耕作放棄地となっている。耕作を続けている田畑においても、耕作者の高齢化が進んでおり、今後は農地の維持についても指針を立てて取り組んでいかななくてはならない。

また、杉等の造成林の放置も景観を阻害している部分がある。聞き取りによれば 30～40 年前には、霊仙寺付近から無明橋も望めたというが、放置された造成林が高く伸びてしまっている。昭和 50 年代に大流行した松喰い虫の被害によっても、植生が変化している部分があり、植生・生態系に関する保全についての取組も実施しなくてはならない。

## 第 5 節 これまでの研究

中山仙境（夷谷）についての研究は、古くは地誌によるものがあつた。西国東郡全体を対象にした国東最初の地誌である『西国東郡誌』（大正 12 年）や、三重地区（長小野と夷を合わせた範囲）を対象にした『三重郷土誌』（昭和 2 年）では、夷地区における寺院・景勝地・石造文化財などについてまとめられており、中山仙境（夷耶馬）の文化財的検討の第一歩であつた。

その後も六郷山夷岩屋の研究は、長い間地域史家によるものが主流であつた。中でも<sup>みすみかんいち</sup>三角寛市氏の検討は香々地町の郷土史研究に多大な影響を与えており、路傍の石仏や小社小堂にいたるまで詳細な聞き取り調査がなされている。その一方で『塵劫記の著者吉田光由が夷にいた』『六本杉』など、地域における歴史観・風景観を描き出す著書も残しており、中山仙境（夷耶馬）の範囲においても、長年地元の人々が培ってきた郷土愛を今に伝えている。

国東半島における寺院研究が大きく進展するのは、昭和 56 年に開館した大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）による調査であり、六郷山寺院遺構確認調査によって、寺院遺跡や地名から六郷山寺院の広大な境内地の詳細な検討がなされている。中山仙境（夷耶馬）の範囲では、夷石屋（夷山霊仙寺）として『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ』（平成 7 年）の中で成果がまとめられている所である。また、国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査でも夷地区は調査対象となった。『豊後国田染荘の調査』にはじまった当調査の主な対象は、圃場整備の憂き目に遭わんとしていた荘園村落遺跡に加え、六郷山をはじめとする九州最古級の仏教文化であり、その第 3 弾であつた『豊後国香々地荘の調査』（平成 10 年）で、六郷山夷石屋周辺の石造文化財や小地名に関する検討が集大成を迎えている。

平成 25～27 年度に行われた大分県名勝分布調査では、夷耶馬と夷山（霊仙寺、実相院、六所神社）としての人文的評価についての調査がなされた。平安時代からの夷地区の歴史を示す『余瀬文書』に見える一帯の景観を表すことばとして「大魔所」を取り上げ、そのイメージが現在に

も引き継がれている「行の場」が多数残されていることが分かった。また、文政2（1819）年に高井八穂が定めた「夷谷八景」に対する再検討がなされ、夷谷の景勝地に関する芸術的視点が整理された。

平成25～27年度には豊後高田市でも、六郷満山寺院詳細調査事業（大分県文化財魅力度アップ事業採択）が行われ、六郷山寺院における詳細な現地調査が行われた。夷岩屋の項目では、坊跡を含む範囲の石造文化財の保存状況等をまとめ、今後の保護・活用における課題を整理した。平成27年度末には『六郷満山寺院群詳細調査報告書』を刊行した。

## 第2章 中山仙境（夷谷）の概要

### 第1節 中山仙境（夷谷）の歴史的変遷

#### ○六郷山夷石屋の発展と夷谷

中山仙境（夷谷）の景観の変遷は、古い時代のもは『余瀨文書』をはじめとして豊富に残る古文書類によって復元できる部分がある。特に坪付注文や、<sup>しいし</sup>四至を示す土地の権利関係の文書には、現在に繋がるような地名が小字レベルで多数登場する。

特に六郷山寺院の最初期の古文書で知られる『夷住僧行源解状案』には、夷石屋の開発の展開が記されている。それによれば、夷石屋の奥地の<sup>こかきはら</sup>小柿原は、岩石や樹木によって人跡が絶えた「大魔所」を、岩屋に籠もりながら、「時々微力を励まして、所在の樹木を切り払い、石木根を堀却し、田畠を開発」した土地であるとされ、過酷で人々を寄せ付けない地であったと表現される。それから長い時間をかけて、夷石屋が六郷山寺院として成熟する中で、谷の開発が進み、徐々に人々の生活が周囲の環境に馴染み始めると考えられる。

西夷地区にも、中世の古文書に見える地名として「蓑払」「木浦松」「道園」「横岳」「小野（迫）」を見ることができ、中世後期には開発が進んでいたことが推定できる。

「別当并院主分田町坪付注文」だけでも、現在地名に比定できる場所は夷地区で40箇所ほどであり、これら地名の検討によって、鎌倉時代～中世後期にかけての夷谷の繁栄の様子を、現地と対照することが容易である【資料⑬の地図参照】。

国東半島ではかつてほとんどの谷で水不足が発生していた。夷地区も例に漏れず水不足が深刻な土地であったことが史料などから確認できる。夷地区では「払」と呼ばれる小規模な耕作地毎に、小型の<sup>いげき（いせ）</sup>井堰を造ることで、少ない水資源を確保してきたことが分かっている。長年の水不足を解決したのが、香々地町域で最大の規模を誇る<sup>いしごうち</sup>石河内溜池で、昭和9年に完成したこのため池によって、香々地町の水田は54町から、新たに38町もの水田が拓かれたと記録に残っている。水田の形状や規模については、この時期に大きな画期を迎えたといえる。

これら中世地名に由来する水田等は、夷地区においてはほとんど圃場整備されずに残されている。ただし、最近では人口減少に伴う耕作放棄地も増え始めており、特に西夷地区にその傾向が強く見られる。

## ○東夷・中山仙境

東夷後背の岩峰の歴史的変遷については、一般的な六郷山寺院の展開で説明できる。六所神社東側の奥ノ院や、祇舎不動（<sup>ぎしや</sup>著闍窟<sup>きじやくつ</sup>）といった岩屋での信仰から、比較的平坦な谷部に居住の場を求めて寺院が展開してきている。坊中岩屋には平安～鎌倉時代の宝塔が残されるなど、文化財にも六郷山夷石屋初期の信仰の様子を探る要素が残されている。

また、夷石屋の開発に関わる古文書にも、東夷裏手に残る地名が多くあり、八景・藤谷藤花の藤ヶ谷、小字名に残る船ヶ迫・鍛冶迫・<sup>つんのぼらい</sup>東南弘が例として挙げられる。

それに対して中山仙境の峯道上には中世以前の石造物などは見られない。中山仙境の修行場としての開発は、中世後期以降であると考えられており、南北朝～室町時代に梅ノ木磨崖仏・線彫板碑などが中山仙境側の耶馬や巨岩に作られたのが最初期である。その後、中世後期～近世前期に拓かれた霊仙寺旧墓地に、磨崖連碑や磨崖五輪塔が造られるようになる。実際に中山仙境で見られる石造文化財は、虎御前宝篋印塔（享保 20（1735）年）や、江戸中後期に造られた千手観音・弘法大師の石仏などである。無明橋の架橋年代は不明であるが、明治～大正時代のもものと推定されている。このように、中山仙境の峯道上の霊場は時代を追って上へ上へと進展していったことが分かる。

勿論、六郷山の僧侶達による修行も行われただろうが、中山仙境の霊場の中心を担ってゆくの  
が大師信仰である。江戸中後期に中山仙境を含めて夷地区に四国八十八箇所の霊場が拓かれたとされ、中山仙境には 30 箇所の霊場が現在にも伝わっている。国東半島の場合、大師信仰は天台僧によって持ち込まれており（天念寺<sup>じょうてん</sup>盛殿法印など）、六郷山の峯入りの道を素地にして、霊場巡りの信仰圏を形成していった。

## ○霊仙寺周辺

現在、夷石屋に関する寺院景観が色濃く残されているのは霊仙寺一帯である。これは夷石屋の坊の筆頭であった根本院が、戦国時代頃に寺院化したものが霊仙寺であり、その周辺が信仰の中心へと変化してきたことによる。中世石造物の分布状況から見ても、中世後期からは夷地区の信仰の中心は霊仙寺周辺に集中し始めたと言える。

宝暦 10（1761）年の中興によって、霊仙寺・実相院・六所神社が立ち並び、およそ今の伽藍配置に落ち着くと見られるが、周辺は明治 10（1877）年の西南戦争の最中、増田宗太郎に煽動された百姓一揆に事を発する火災の被害を受け、本堂及び講堂（六所神社本殿の位置にあったという）が全焼している。

六郷山寺院では坊が寺院化したものが多く、本堂が庫裏と一体化していることが特徴である。実相院の建物を見れば、多少の増改築はあるが本堂と庫裏は一体化している。昭和初期の古写真によれば、茅葺の建物であったことが分かり、昭和 30 年代に瓦葺に変更したという。一方の霊仙寺は本堂と庫裏は別棟になっており、昭和初期の古写真によれば本堂は瓦葺で、庫裏は茅葺のままである。現在は霊仙寺の庫裏も瓦葺になっている。

六所神社本殿の位置には、夷石屋講堂があったと考えられ（『太宰管内志』によれば、霊仙寺の半町上手に講堂があったと記載がある）、それと思われる巨大な礎石が多数残されている。安政年間に上部の岩石が崩落し、燈籠などと一緒に崩れたという。その後に再建されたとされるが、先述の火災で講堂を崩し、本殿を建立したとされる。一連の騒動には神仏分離令も関連していたと伝わり、破却した石仏（仁王像など）も一帯に放置されている。

元々の六所神社とされる夷神社の建物は古く、江戸時代に遡ると考えられている。岩屋の中につくられており、位置の移動もないと思われる。

奥ノ院の建物は、平安仏を安置する簡易な覆屋となっている。柱や梁の跡であるほぞ穴が岩屋に残されているため、前段階の堂宇があったと考えられる。

## 第2節 主要な構成要素

### ○範囲全体

夷地区は、国東半島の中でも大規模な岩峰群が集中している地域である。中世以降に靈験あらたかな巡礼の道として拓かれる中山仙境の岩峰、平安時代から六郷山夷石屋の僧侶達の修行と開発に関する歴史が集積する東夷地区の岩峰、いくつかの磨崖仏が残り、仏師板井氏らの故郷で知られる西夷地区の耶馬と3つの岩峰に分かれ、それぞれに風光明媚な景色を有している。

これらは視点場によって、重なりあったり、横に並んだりして、奇岩の表情は移り変わり、観賞者を飽きさせない。例えば西夷・割石の附近から下手を見れば、左手に西夷の岩峰群、右手には中山仙境、そしてその奥に東夷の岩峰群が見え、東夷・一路一景公園から見れば、前方に中山仙境の奇岩が大きく見え、右手奥に東夷の耶馬が見える。

谷間には夷石屋の坊の筆頭であった根本院が寺院化した靈仙寺、それに並列するように実相院・六所神社があり、夷地区の信仰の中心となっている。中山仙境には江戸時代以降、六郷山や四国八十八箇所の移し靈場、三十三観音靈場の巡礼の道として発展し、簡易な龕・石造覆屋に弘法大師や観音菩薩の石仏が配置されている。中山仙境に位置する無明橋は、西国東地域に特徴づけられる修場である。桁橋状で幅50cmほどと、随一の難所として知られている。

文政2(1819)年には、国学者・高井八穂によって八景が定められて、一帯の風景に芸術的視点が添えられ、四季を通じて風景を楽しむ素地ができています。

### ○夷谷八景

文政2年(1819)に、本居宣長の弟子・高井八穂が、板井氏の頼みにより夷谷の八景を定め、和歌を詠んだとされる。文政2年は頼山陽が耶馬溪を「耶馬溪山天下無」と賞した翌年であり、豊の国の岩山の景勝地の評価にとっては画期となった年であったといえる。

楽庭櫻花・藤谷藤花・夷川螢火・高城秋月・大平峯雪と四季を通じて一帯の風景を愛でるもの、車橋夜雨・靈仙晩鐘・六所宮燈といった地区の名所を切り取るものの2パターンに分類できる。

【楽庭櫻花(現況写真1) はかりこ祝子がたち舞う庭の櫻花いくよの春のかざしなるらむ】

東夷・六所神社の御旅所は現在では楽庭神社とも呼ばれる。国東半島で盛んに行われていた楽打ちが行われていたが、現在では廃れてしまっており、その詳細は不明である。現在は御旅所の前に神楽殿が設けられており、春先の桜が咲く頃に夷里神楽が舞われる。

【藤谷藤花(現況写真2) う角ぬさはふ岩根を越えて名美ぐはしく花咲かかる谷の藤波】

善華坊の故地と伝わる前花から北に伸びる細道を登った先に「藤ヶ谷」という字が残っている。夷地区では耶馬にはりつくように藤の花が咲くことがよく見られるが、藤ヶ谷のどこを指して八景としたかは特定することができなかった。



【夷川蛍火（現況写真3） 夷川<sup>集</sup>ずだく螢のかげを見てまたしらぬ火とおもいけるかな】

夷川は東夷・竹田川の別名であり、現在でもホタルが生息している。夷谷の棚田に水が張られる初夏の頃に、多く飛び交う蛍火を観覧できる。

【高城秋月（現況写真4） さやかなる光りや代々にま<sup>集</sup>し<sup>晴</sup>らなく高城の山の秋の夜の月】

高城は中山仙境の最高点に位置する。城の付く地名は夷地区には多く、人を寄せ付けない土地を指すとされる。月が高く昇った時に、高城を見れば、耶馬の輪郭を微かに確認できる。現在でも東夷では、月見の季節に観月祭を開催しており、地区に最も浸透した景観の1つでもある。

【大平峯雪（現況写真5） ふりつもる雪にうもれて岩角も平らに見ゆる峯のかよい路】

前田の南側に位置する小牟礼山（別名：大平山 真玉町の有寺地区に所在するメサ状の山）に雪が降り積もる様子を指す。大平という地名は夷地区に多いが、前田地区から見える大平山はその形状から「前田富士」と呼ばれ親しまれている。

【車橋夜雨（現況写真6） 橋の名にかけつゝ夜半の雨音をしのび車の寄るかとおもふ】

かつて前田地区の中山仙境登り口に架かっていたとされる石造車橋「平治橋」がこれにあたるという。現在では橋は架け替わっているが、「へいちはし」と刻まれた親柱のひとつが登山口の脇に残されている。

【霊仙晩鐘（現況写真7） 世の中のほかの住家にいかばかりよし<sup>吉</sup>婆蘇山の入相の鐘】

吉婆蘇山とは霊仙寺のかつての山号であり、現在も鐘楼門には室町時代作の梵鐘がさげられている。かつては時刻を告げるために打ち鳴らされており、日の入りを報せる鐘の音は静かな夷谷に響き渡ったことだろう。

【六所宮燈（現況写真8） やはらくる光をよゝに見するかな六つの宮居の夜半のともし火】

六所神社の境内には多数の燈籠があるが、その内の1基は文化11年（1814）の造立である。八幡文化の影響を受けて各部材が六角形となっており、笠は蕨手まで詳細に造られている。

## ○中山仙境

東夷地区と西夷地区の間にある中山に設けられた霊場で、六郷山寺院の峯入りや大師信仰の巡礼道が融合し、現在も麓の寺院に関する石造文化財や石仏が、所々に安置されている。長く続く尾根上の峯道には無明橋・馬の背などの難所も多く、修行の道としての緊張感のある風景が今に伝わっている。夷地区全体の崇敬を集める霊山であり、露出する岩壁には磨崖仏（東夷では旧霊仙寺、西夷では梅ノ木磨崖仏）や墓地（中山仙境内の虎御前宝篋印塔、東夷の霊仙寺旧墓地など）が造られる。

## 【磨崖五輪塔】

中山仙境の登り口（現況写真9）付近の岩壁に磨崖五輪塔が彫り込められた部分がある。室町

時代後期から江戸時代初期にかけて、中山仙境側の岩壁には高さ 50 c m 程度の磨崖五輪塔が多数制作されている。

#### 【虎御前宝篋印塔（現況写真 10）】

中山仙境のメインのルートを外れた先の露頭に享保 20（1735）年の銘の入った宝篋印塔が安置されている。中世後期以降、中山仙境に向かって墓地が展開していることが夷岩屋境内の特徴の 1 つであり、その典型的な石造物の 1 つである。

#### 【無明橋（現況写真 11）】

中山仙境の無明橋は、幅 50 c m 程度、長さ 1 m 程度の石を 2 本合わせて置いた所謂「拝み合わせ」による桁橋状の石橋である。露頭間を渡しており、北側は切り立った崖になっている。中山仙境を象徴する修行場であり、かつては霊仙寺付近から目視できたという（現在は造成林等により確認できない）。

平成 29 年 12 月 3 日の踏査時に、桁の下面に梵字らしき文字が発見された。日光菩薩・月光菩薩の梵字と判読でき、設置面にも薬師如来の種字が刻まれる可能性がある。

#### 【高城（現況写真 12）】

中山仙境の最高峰。大師信仰の霊場になっており弘法大師と観音菩薩の石仏や、天照皇大神の文字を刻む塔婆型の碑が安置される。俗人を寄せ付けない岩峰のことを「〇〇城」と呼ぶことがある（夷地区では小字に石城・東城・鬼ヶ城）。

#### 【馬の背（現況写真 13）】

高城より先の痩せ尾根は「馬の背」と呼ばれる。激しい暴風雨のことを「馬の背を降り分ける（横殴りの雨では、馬の背の片面しか濡らさないとされるため）」と呼ぶが、香々地出身の詩人・江口章子も随筆中で何度か「馬の背を降り分けるという」と表現している。

#### 【隠れ洞穴（現況写真 14）】

中山仙境の峯道上では最大の岩屋でかなり奥に深い構造になっている。弘法大師や阿弥陀如来・虚空蔵菩薩・如意輪観音など多くの石仏が安置されている。安土桃山時代に黒田如水・長政父子に謀殺された豊前の武士・宇都宮鎮房の家臣達が、隠れ洞穴に籠もっていたとされる伝説がある。

#### ○東夷

中山仙境を挟んで東側の谷に展開する集落。夷～長小野地区の広い範囲を寺域とした六郷山夷石屋の中心的な坊（霊仙寺・実相院・六所神社）、末寺である焼尾岩屋などがあり、仏教遺跡として中世の木彫仏・石造文化財などが多く残されている。夷谷八景の多く（藤谷藤花・夷川螢火・霊仙晩鐘・六所宮燈）が東夷である他、中山仙境の岩峰の内、最も切り立った面は東側にあり、前花～鳥越にかけてが、中山仙境を外から観賞する際の最も有効な視点場となっていることから、古くから写真撮影のポイントに選ばれ、鳥越に一路一景公園がつくられている。

#### 【靈仙寺（現況写真 15）】

六郷山夷石屋の中心的な坊の1つである根本院が寺院化したものである。明治10年の西南戦争の折に、増田宋太郎に煽動された民衆によって焼き討たれたとされ、堂宇のほとんどはそれ以降の建築である。鐘楼門のみが現六所神社より移設されたと伝わり、江戸時代後期の築とされ、一帯の景観のシンボルにもなっている。「靈仙晚鐘」は夷谷八景に数えられ、香々地公民館ホール of 緞帳にもこの鐘楼門が描かれている。

#### 【実相院（現況写真 18）】

靈仙寺と同じく六郷山夷石屋の中心的な坊の1つが寺院化したものと考えられている。境内に所在する巨大な国東塔は、明治10年の焼き討ちの際に六所神社で打ち毀されたものを積み直したとされている（現況写真 19）。後背には小規模ながら墓地があり、板碑1基は南北朝時代のものである。

#### 【六所神社（現況写真 20）】

六郷山夷石屋の寺社境内の中心的な区画であったと考えられている。本殿の建つ位置は大きな岩室となっており、夷岩屋の講堂があったと推定されている（大型の礎石や、屋根の跡が残されている（現況写真 24））。また、旧境内社と考えられる今夷社の堂（現況写真 22）や、僧形の磨崖像を造り、平安仏が部分的に残る堂宇を持つ奥ノ院（現況写真 23）が残されている。夷谷八景の「六所宮燈」は当地を指すと考えられ、当時からある燈籠として、かなり大型で意匠に富んだものの1基が残されている。

#### 【靈仙寺旧墓地（兄弟割石）】

靈仙寺旧墓地（中世～近世前期）は、靈仙寺から見て夷川を渡った先に配置されている。五輪塔を中心に200基を超える中世石造物が密集しており、特徴的なものとして墓地の最深部に磨崖連碑・磨崖五輪塔が連なって見られる（現況写真 25）。墓地の段を形成する石積みは、薄石を敷き詰めた野面積みで中世に由来するとされる。墓地の最前面には兄弟割石と呼ばれる大岩があり、墓域の入口を示している（現況写真 26）。兄弟割石の上には近世の宝篋印塔1基が建っている。

#### 【蛭子社（現況写真 27）】

靈仙寺旧墓地より数百メートル東へ行った所に見える「蛭子大神宮」の扁額のある鳥居から石段を登った先にある岩屋内の小社。東夷では六所神社の根源と伝えられており、六所神社の神事の際には、必ず蛭子社から祝詞を奏上する。

字「今夷」に位置し、『六郷山巡礼百八十三ヶ所靈場記』に記載のある六郷山の峯入りのルートにも「第三百四十四番 三重村夷今夷」と登場する。

#### 【焼尾阿弥陀堂（現況写真 28）】

建武の注文に記載のある夷石屋末寺の1つ「焼尾岩屋」の故地とされる。平安時代作の木造阿弥陀如来立像【市指定有形文化財】の他、多くの仏像が安置される。かつての寺名に岩屋と付くが、岩屋の故地は不明である。

### 【焼尾塔ノ本国東塔（現況写真 29）】

焼尾阿弥陀堂の直下には、多くの石造物が分布する墓地があり、焼尾岩屋と関連すると考えられている。その中にある高さ 226.0cm の国東塔は、南北朝前期の様式を守る古塔で、県指定有形文化財となっている。墓地の南端に位置しており、県道側から見ればよく視認することができる。

### 【坊中岩屋・坊中宝塔（現況写真 30）】

霊仙寺の西側に 300m ほど下った場所に、十連坊の故地とされる字「十連」があるが、その山腹の岩屋に、六郷山でも最古の石造宝塔が 3 基（1 基は完形）残されている。装飾性のない簡素なつくりをしており、鎌倉前期の造立と推定されている。

### 【祇舎不動（現況写真 31）】

中世には「耆闍谷」と見える地名が「祇舎」「祇舎谷」という現在の字に繋がっていると考えられる。「耆闍」とはインドの霊峰「耆闍崛山」から来た言葉と考えられ、同山の別名である「霊山」は霊仙寺の寺号の由来にもなったと考えられる。長い石段の先に祇舎不動と呼ばれる小堂があり、中には石造の不動明王が祀られている。霊仙寺・実相院の僧が春・秋に交互に供養をしてきた霊場である。祇舎不動を越えると旧国見町との境の岩峰が近づいてくる。

### 【高岩（現況写真 32）】

前田・楽庭の辺りから山道に入り、祇舎不動の先に行けば、国見側に抜けるルートとなっており、豊後高田・国東の市境にある露頭を高岩と呼んでいる。字「堂明」に位置している。

### 【藤ヶ谷】

六所神社より東に数十メートル向かった先から国見側に抜ける山道があり、その途中にあったとされる藤の名所。鎌倉後期の坪付注文に「藤か谷」と見える他、夷谷八景の藤谷藤花がこれにあたる。現在は造成林化しており、藤花を見られる場所は少ない。

### 【一望岩（現況写真 33）】

藤ヶ谷の先に進むと国見側へと抜けられるが、峠道の頂上には一望岩と呼ばれる岩瘤がある。ここからの眺望は東夷の耶馬を横から見ることになり、屏風状に広がる岩峰を見ることができる。

### 【石河内溜池（現況写真 34）】

東夷・字「羅根」に位置する溜池で、明治時代から築立が計画されていたが、様々な理由で順延し、結局昭和 9～13 年にかけて築立された大型の溜池。従来、夷地区は小規模な池を造ったり、イゼ懸かりを連続させたりして耕作を営んできたが、この池の完成により水不足の問題が大きく解消された。

### ○西夷

中山仙境を挟んで西側の谷に展開する集落。中世には叢払・木浦松・道園・横岳などの地名が見え、その頃には既に開発が進んでいたと見られるが、六郷山の坊跡に関する記載はほとんど無い。谷からは中山仙境や東夷の耶馬が見える他、西側にも屹立する岩峰の風景を見ることができ

る。字「小野迫」にある梅ノ木磨崖仏や、巨岩に彫られた線彫板碑など、夷地区における磨崖の文化の出発点となるような文化財が残されている。江戸時代に西国東の仏教文化を支えた仏師・板井氏のふるさととして知られ、その氏神である妙見神や猿田彦大神に関する文化財も多く、神仏混淆の色合いの濃い地区であるといえる。

#### 【線彫板碑（現況写真 35）】

中山仙境の登山口から西夷の方に少し入った所の人家に、線彫板碑へと繋がる細道がある。南北朝時代～近世初頭にかけての墓地であると推定され、巨岩に線彫で彫られた連碑を中心に、五輪塔群・宝篋印塔・板碑型墓碑などが分布している。中山仙境側を向いている初期の仏教遺跡で、国東半島に線刻の板碑は珍しく、県の史跡に指定されている。

#### 【梅ノ木磨崖仏（現況写真 36）】

字「梅ノ木」にある磨崖仏で、中山仙境に聳える岩壁を使って、木造覆屋の中にある磨崖仏4軀と、その左右に磨崖五輪塔19基と線彫連碑をつくっている。磨崖仏は中央に高さ約70cmの地藏菩薩、その左側に比丘像、右側には2軀の比丘尼像が彫り込められている。磨崖五輪塔は下部に奉納孔が穿たれており、周辺に散在する五輪塔などと同じで墓碑の役割を果たしていたと考えられている。南北朝時代から室町時代にかけて展開しており、線彫板碑の名称で県の史跡に指定されている。

#### 【鬮見宮（現況写真 37）】

西夷・字「妙現」に位置する小社で、岩屋の中に本殿がおさまっている。鳥居扁額の文字は「鬮見宮」であるが、地元では「妙見」の字を使うことが多い。西夷地区に多い板井家の氏神であり、天御中主神を祀っている。

#### 【兄弟割石（現況写真 38）】

西夷地区の水田跡の中にも、東夷と同様に兄弟割石と呼ばれる巨石がある。東西の石の割れ目は繋がっているという伝承がある。当地の小字は割石であり、兄弟割石が古くから西夷の風致景観の1パーツであったことが分かる。

#### 【猿田彦大神像庚申塔（現況写真 39）】

西夷地区では、江戸中期頃より猿田彦大神への信仰が強まり、宝暦3年造立の猿田彦大神像庚申塔が残されている。西夷地区は板井派仏師の故郷としても知られ、当該庚申塔は地元に残された彼らの代表作とも言える。この庚申塔において行われる庚申祭（待上講<sup>まちあげ</sup>）は、夷地区全体の信仰とも密接に関係しており、2年に1度、年末に近い庚申の日に、楽庭・六所神社・庚申塔にそれぞれ注連縄を掛けて祝詞をあげている。

#### 【板井春哉<sup>しゅんさい</sup>石像（現況写真 40）】

江戸時代末期から明治時代にかけて夷地区で活躍した板井春哉を弟子達が顕彰するために制作した石像。西夷をふるさととする板井姓の石工であり、石仏や石造アーチ橋（東夷地区の戎橋【市指定有形文化財】など）といった作品を夷地区に残した。他にも医療・教育など、多分野で

の活躍で知られる。

#### ○前田地区

##### 【平治橋】

前田の中山仙境登山口の近くにあった車橋（アーチ橋）。古写真で付近の様子を確認することができるが、現在ではコンクリート製の橋に架け替わっている。すぐ近くに親柱の1本が現存しており「へいちはし」と平仮名で橋名が彫り込められている。板井春哉らの作とされている。

##### 【楽庭神社（現況写真 41、六所神社御旅所）】

神社名にある楽庭は、小字名にもなっているが、古い記録によると国東半島では少なくなってしまう楽打ちが行われていたことが分かる。旧六所神社跡であるとも伝えられるが、現在では六所神社の御旅所として知られており、六所神社に関する社はない。

現在では、楽打ちに代わりに「夷里神楽」が奉納され、特に4月に行われる春の大祭で舞われる神楽は「麦祈祷」と呼ばれ、大切にされている。丁度その季節に境内の桜が咲き誇り、夷谷八景の「楽庭櫻花」として、連歌や漢詩の題材となってきた。

#### ○周辺の景観

##### 【一路一景公園（現況写真 42）】

平成3（1991）年に大分県によって整備された、中山仙境（夷耶馬）を広く観賞できる公園。ここからは中山仙境部分（大仏岩・高城・白岩・烏帽子岩・七福岩）と東夷部分（不動岩・鯨岩・高岩）をあわせて見ることができる。

##### 【小牟礼山（大平山、前田富士）】

前田地区（楽庭神社よりやや南東側）より南西側を見ると、富士山のような稜線を持つ山が見える。国東半島によく見られるメサ状の山であるが、前田地区から見たときに富士山状に見えるため「前田富士」の異名で親しまれている。

小牟礼山は山頂が平らかなことから、別名「大平山」ともいい、夷谷八景の「大平峯雪」にもなっている。

### 第3節 まとめ

中山仙境（夷谷）は、六郷山寺院の内、修行の寺院であった中山本寺の1つである「夷石屋」の歴史の基礎となった岩峰景観である。

夷地区の岩峰は3つの部分から成っている。具体的には、東夷で展開した夷石屋の坊の筆頭である霊仙寺一帯の後背に聳える岩峰、西夷の西側に展開する岩林状の岩峰、そして東西夷の中心を縦断する中山仙境と呼ばれる巡礼の道を含む岩峰である。これらの岩峰は様々な視点によって、奇岩は表情を変貌させ、観賞者を惹きつけてやまない。

中山仙境（夷谷）の範囲一帯は、平安時代の古文書を含む『余瀨文書』の検討によって、中世地名の遺称地を多数比定でき、夷石屋住僧によって行われた寺院・水田の開発の歴史を垣間見ることができる。平安時代「大魔所」と呼ばれた夷地区は、夷石屋の発展とともに少しずつ切り開かれ、東夷の耶馬の間や、夷川の谷間に沿って「払」と呼ばれる小規模な耕作地が誕生していき、

「仏の里」へと生まれ変わったのである。

中世後期から近世にかけては、中山を霊験あらたかな土地として信仰し、修行場・巡礼の道が拓かれるようになった。中山仙境に向けて夷石屋住僧の墓地や磨崖仏が造られるようになり、中山仙境の峯道筋には霊場巡りの石仏や、西国東に特徴づけられる無明橋も見られる。

六郷山の解体によって勢力を失う夷石屋も、江戸中期には霊仙寺・実相院・六所神社に再編されて復活し、仏師・板井氏によって多くの石造文化財に彩られる神仏混淆の仏教文化が開花した。文政2（1819）年には、その板井氏の依頼によって、国学者・高井八穂が「夷谷八景」を定めて、一帯の景観に芸術的視点を添え、それを題材に和歌や連歌などが詠まれる文化が醸成されてきた。

## 第3章 中山仙境（夷谷）と豊後高田市

### 第1節 名勝としての中山仙境（夷谷）の意味

六郷山寺院に関する文化財指定は、国宝指定がなされている富貴寺大堂や、真木大堂・熊野磨崖仏・長安寺・天念寺などの仏像など、有形文化財が中心であったが、近年では様々な観点から文化遺産としての評価が定着してきている。具体的には、「田染荘小崎の農村景観（六郷山の岩屋を含む）」の重要文化的景観選定（平成22年）、「富貴寺境内」の史跡指定（平成25年）、「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」の名勝指定（平成29年）がある。

豊後高田市は国東半島の西半分に位置し、山間部には多くの岩峰地形を有している。それらには古代より宇佐宮・弥勒寺系の僧侶や修験者の格好の修行場として見出された場所が多く、市内には六郷山寺院の中でも修行の寺院とされる中山寺院が多く分布する。歴史的に見ればこの岩峰群と六郷山寺院は切り離せない関係にあり、岩峰の修行場を見上げ、また岩峰に登って、国東半島の歴史的素地となったけしきを体感することは、国東半島の岩峰の観賞方法の1つとして江戸時代以降に定着してきた。

それに加えて、中山仙境（夷谷）においては、国学者・高井八穂によって夷谷八景が定められ、四季折々の自然とともに岩峰・寺院景観を愛でる文化的素地が形成された。その後、大正12年に編纂された地誌『西国東郡誌』の中で、夷・無動寺・天念寺・田染上野などが「奇勝」として取り上げられ、現在においても住民に岩峰景観の価値が浸透している。特に中山仙境（夷谷）は、旧香々地町・新豊後高田市を象徴する景観として認知されている。

10年に1度程度行われる現在の峯入り行では、行者達は中山仙境を登らないものの、平成29年4月に行われた峯入り（『霊場記』に記された183箇所を踏破した）では中山仙境も渡っている。活用面では平成26年には「国東半島峯道ロングトレイル」のコースが開通し、中山仙境（夷谷）の範囲はコースの目玉の1つとなっている。中山仙境（夷谷）の範囲一帯が、名勝としてまとまりを持つことで、地域内の回遊性も高まり、ロングトレイルの利用者の満足度も高まると考えられる。

### 第2節 一路一景公園の役割

一路一景公園は、夷谷の風致景観を観光振興に活かすため、大分県が平成3（1991）年に整備

した公園で、中山仙境（夷谷）を觀賞するための展望台となっている。

そこから展望できる岩の名前を示す看板が設置されており、県指定名勝に関わるガイドンス施設としての役割もある。

### 第3節 保存活用について

中山仙境（夷谷）の保存活用については、指定後に策定を予定している保存活用計画において、各構成要素の保護に係る詳細な現況確認、修景事業に必要な情報のまとめ、活用に資する設備に関する情報収集（登山道、視点場など）に関する具体的な検討を行うこととしている。

その後、保護の部分に関しては、修景事業に取り組み、岩肌がよく見えていた昭和中期以前の状態に耶馬景観を可能な限り近づける作業を行う。夷谷八景の内、幾つかの景については、選定時の状態をとどめていないため、十分な情報を集めた上で往時の状態を取り戻す整備を検討する。また、小規模堂宇・石仏などは経年劣化が進んでいるため、順次補修が必要になってくる。一路一景公園・霊仙寺等には、名勝における人文的評価・景観の歴史の変遷についての情報を標示する説明看板等がないため、来訪者がその価値をより深く知るための整備が求められる。

活用に係る事業としては、シンポジウムによって市内外の人々への周知を行う他、ロングトレイル関連のモニターツアー、地域の行事である「中山仙境春祭り」「夷里神楽」でのPRを行っていく予定にしている。パンフレット作成・ホームページでの情報公開に関しては、平成28年夏に耶馬のフォトコンテストを開催しており、優秀作品を上手く活用した広報を行っていきたい。

以下に、天念寺耶馬及び無動寺耶馬における保存活用を考える上での課題を整理しておく。

- |             |   |
|-------------|---|
| ①視点場の確保     | 修景事業（樹木の剪定・伐採など）                                      |
| ②視点の再現      | 構成要素・八景の復元<br>耶馬に登れない人への配慮（映像・模型）                     |
| ③峯道・霊場の安全確保 | 峯道の定期メンテナンス（鎖・足場）<br>岩屋・石造文化財・建築の補修（落下防止）             |
| ④周知広報       | シンポジウム・バスツアーなど市民向けのイベント<br>本市・商工観光課との連携による市外へのプロモーション |
| ⑤管理団体の設定    | 組織運営の強化   |



## ○参考文献

- 大分県『国東半島県立自然公園 自然環境学術調査報告書』（2009年）  
大分県自然環境学術調査会野生生物専門部会編『レッドデータブックおおいた～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～』（2001年）  
大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ』（1995年）  
大分県立歴史博物館『豊後国香々地荘の調査』（1999年）  
香々地町編『香々地町誌』（1979年）  
三重郷土審議会編『三重郷土誌』（1929年）  
酒井富蔵編『豊後高田市誌』（1957年）  
西国東郡編『西国東郡誌』（1923年、高田町）  
文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（2016年）  
豊後高田市『六郷満山寺院群詳細調査事業報告書』（2016年）  
豊後高田市『豊後高田市史特論編 くにさきの世界—くらしと祈りの原風景—』（1996年）  
豊後高田市『豊後高田市史』（1998年）  
真玉町誌刊行会編『真玉町誌』（1978年）  
松本達郎・野田光雄・宮久三千年『日本地方地質誌 九州地方』（1962年、朝倉書店）  
三村晃功『近世類題集の研究：和歌曼荼羅の世界』（2009年、青簡舎）

## ○参考史料

余瀬文書より

- ・『夷岩屋住僧行源解案』
- ・『種貞夷山小墻原名四至証状』
- ・『別當并院主分田町坪付注文』

その他の古文書類

- ・『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写』（長安寺文書）
- ・『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』（長安寺文書）
- ・『吉弘統幸願文』（靈仙寺文書 ※原本散逸のため、『三重郷土誌』より転載）

古記録類

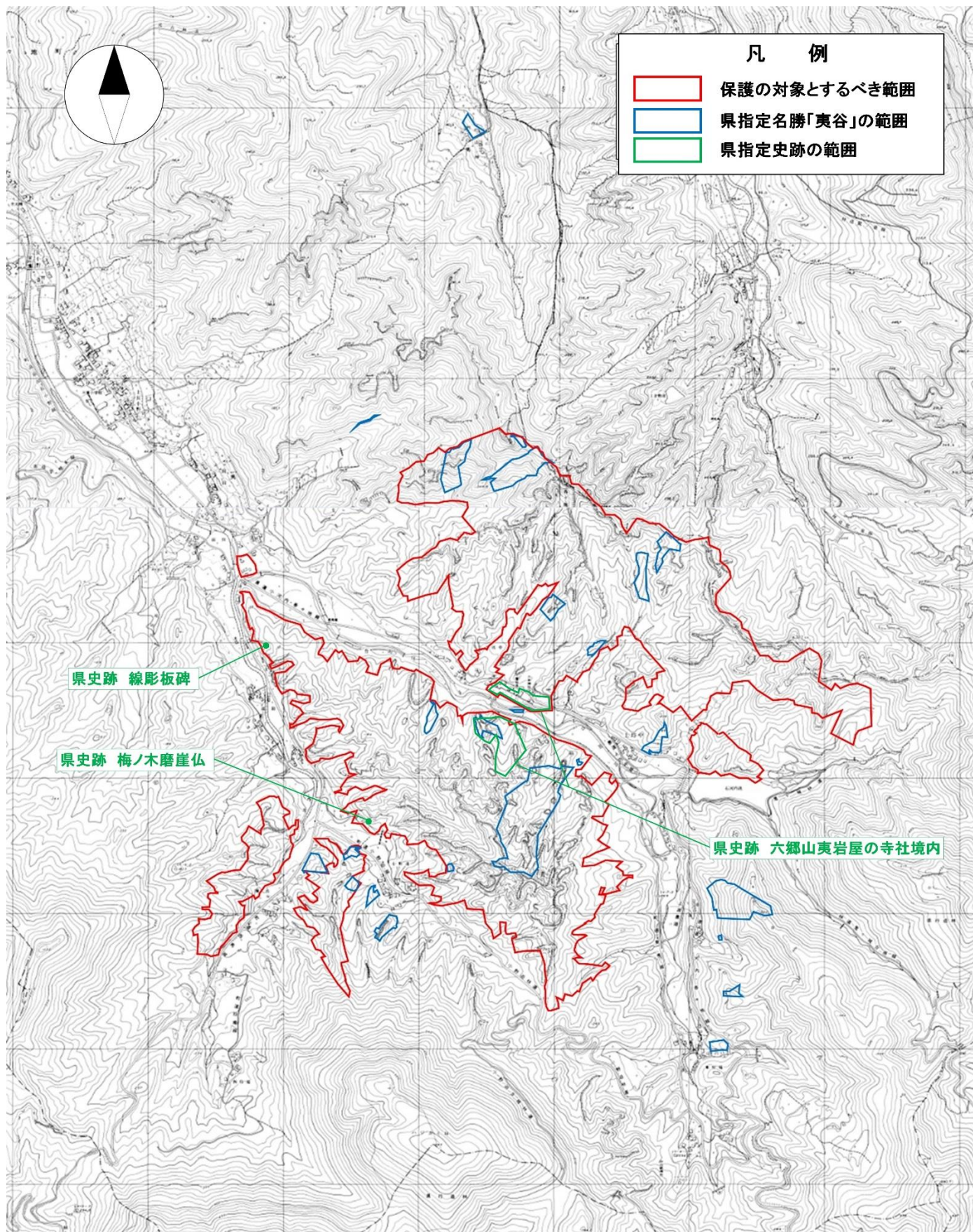
- ・『六郷山年代記』（長安寺所蔵）

古典籍類

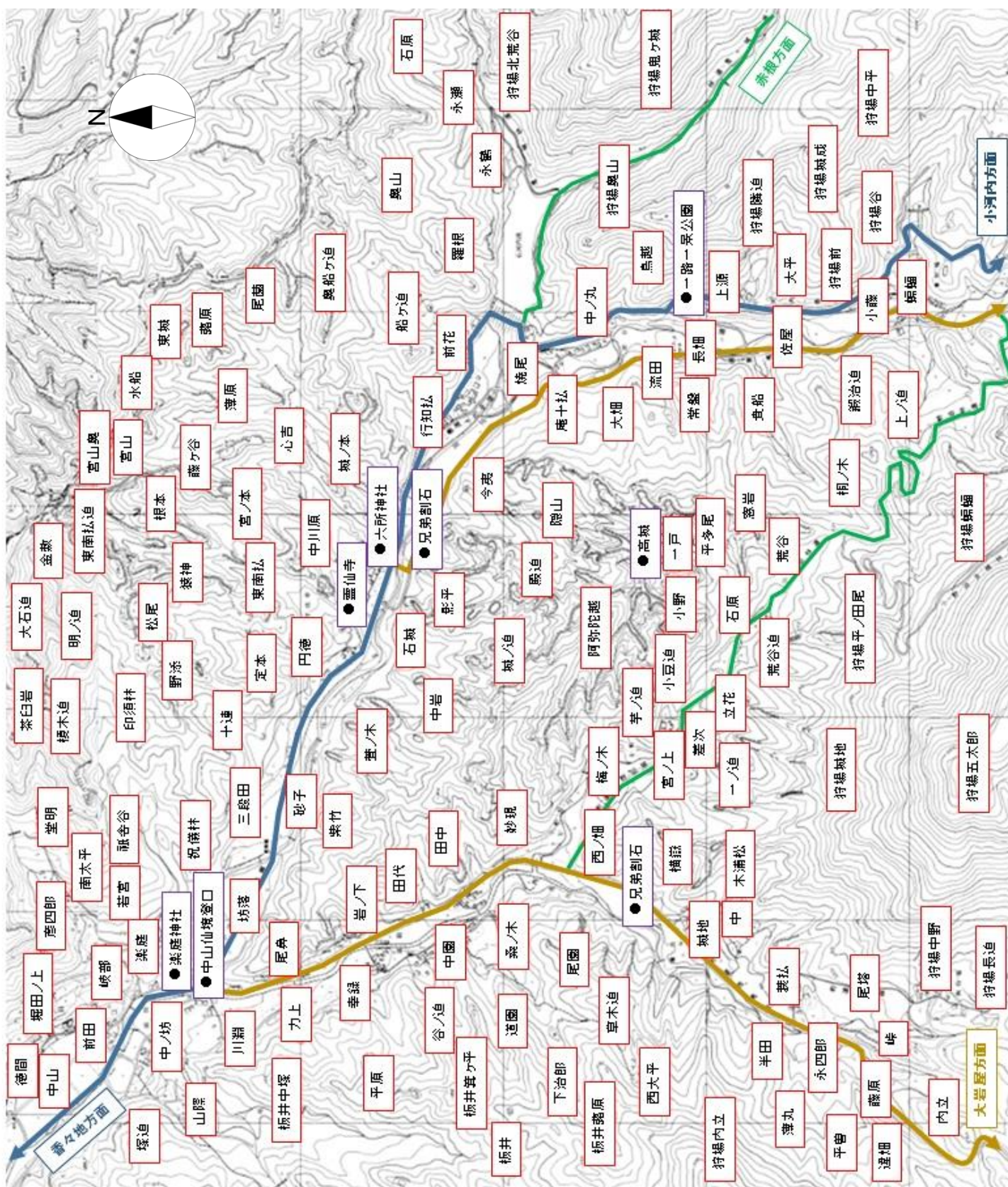
- ・高井八穂撰『古詞類題和歌集』（早稲田大学所蔵）
- ・高井八穂撰『今古仮名遣』（早稲田大学所蔵）



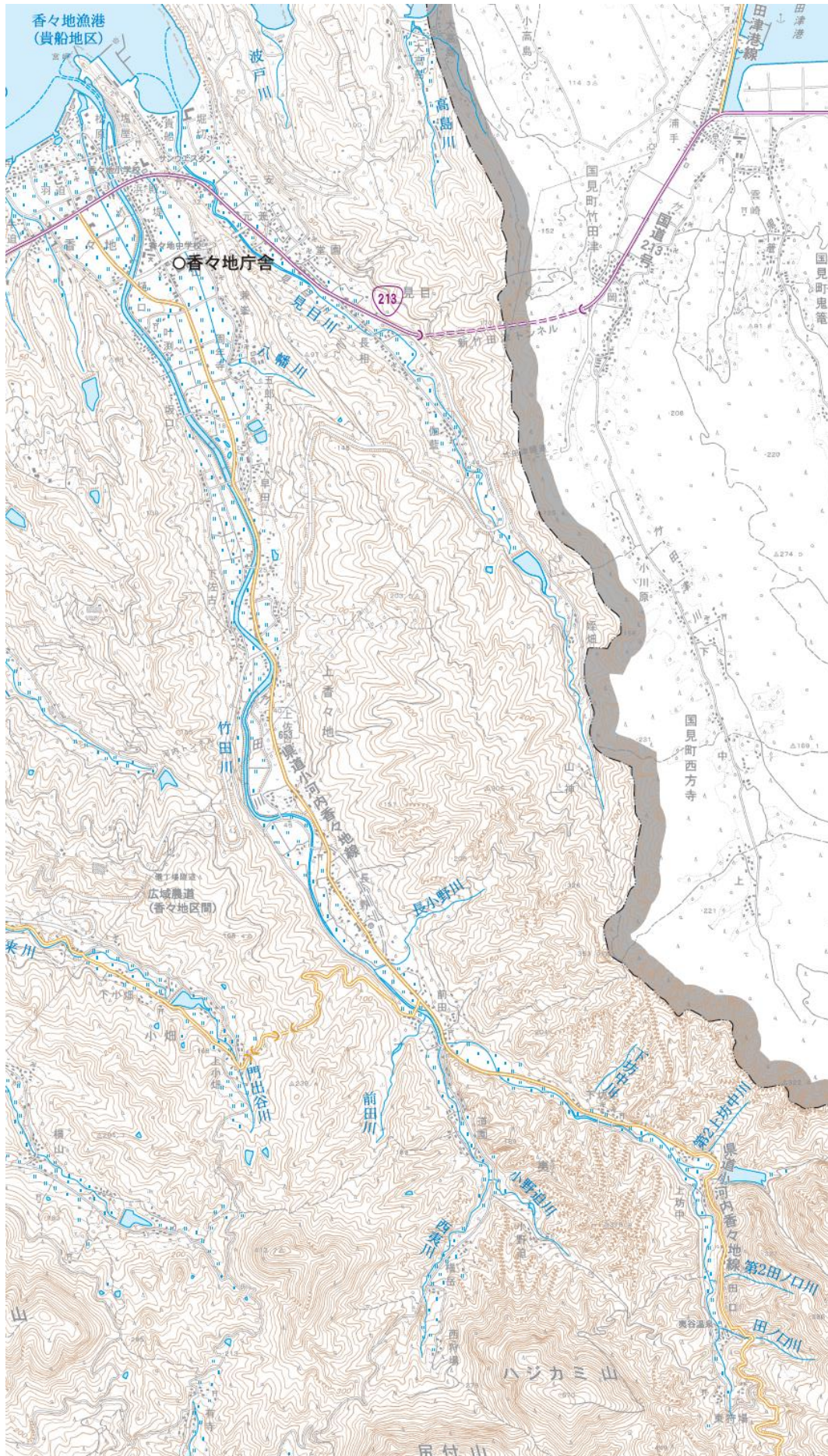
②中山仙境（夷谷） 周辺文化財



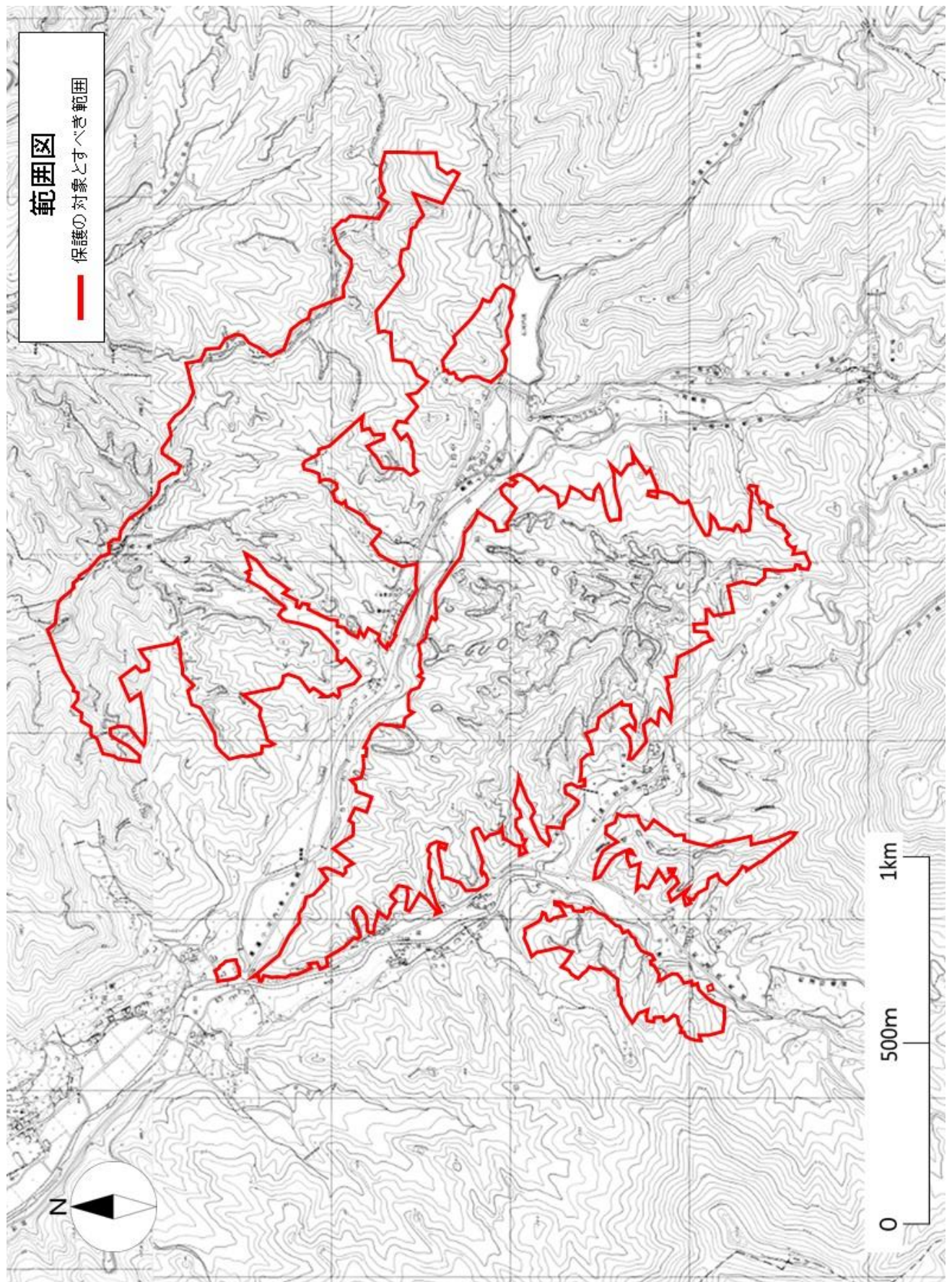
③夷地区小字図



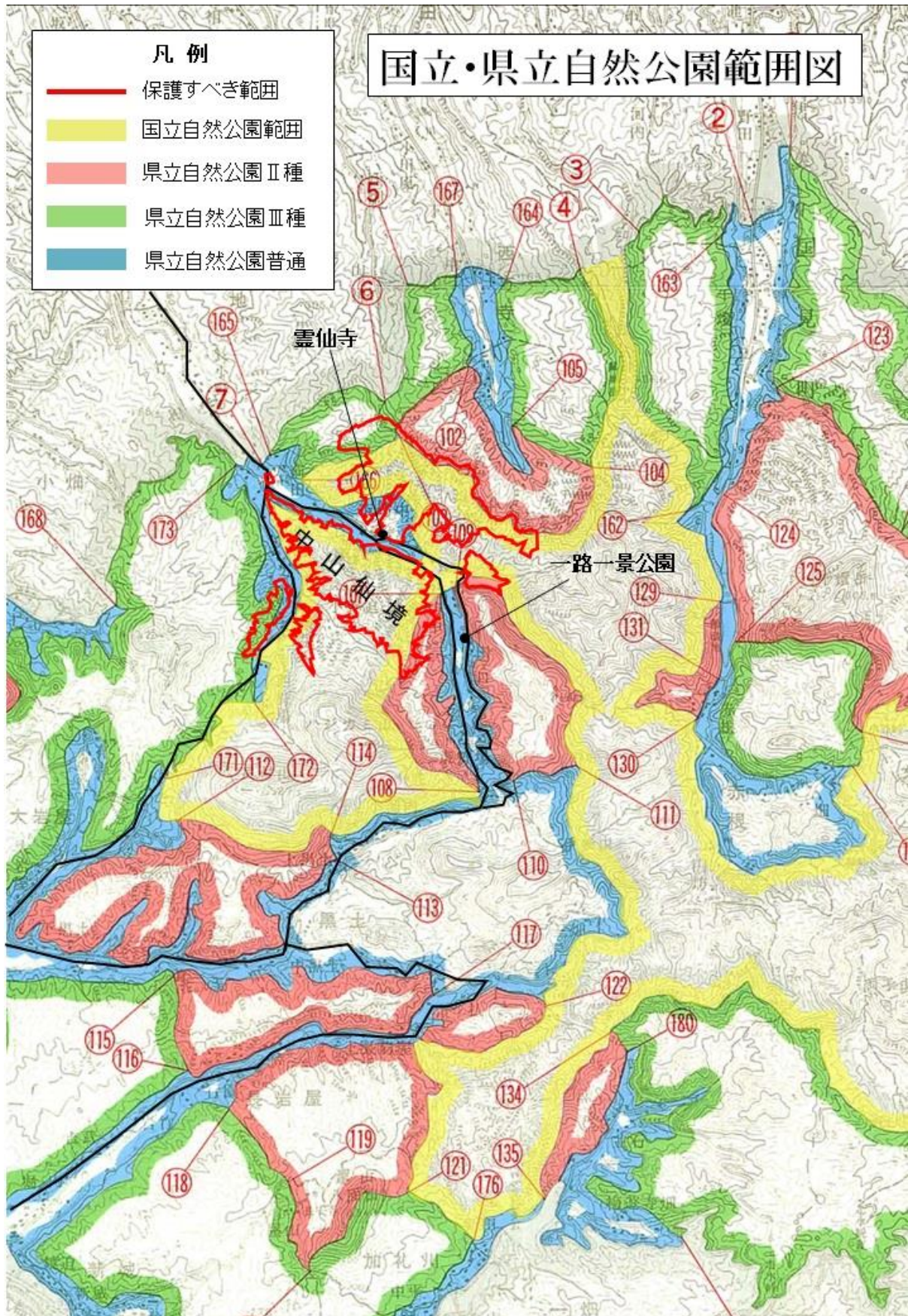
④河川の名称



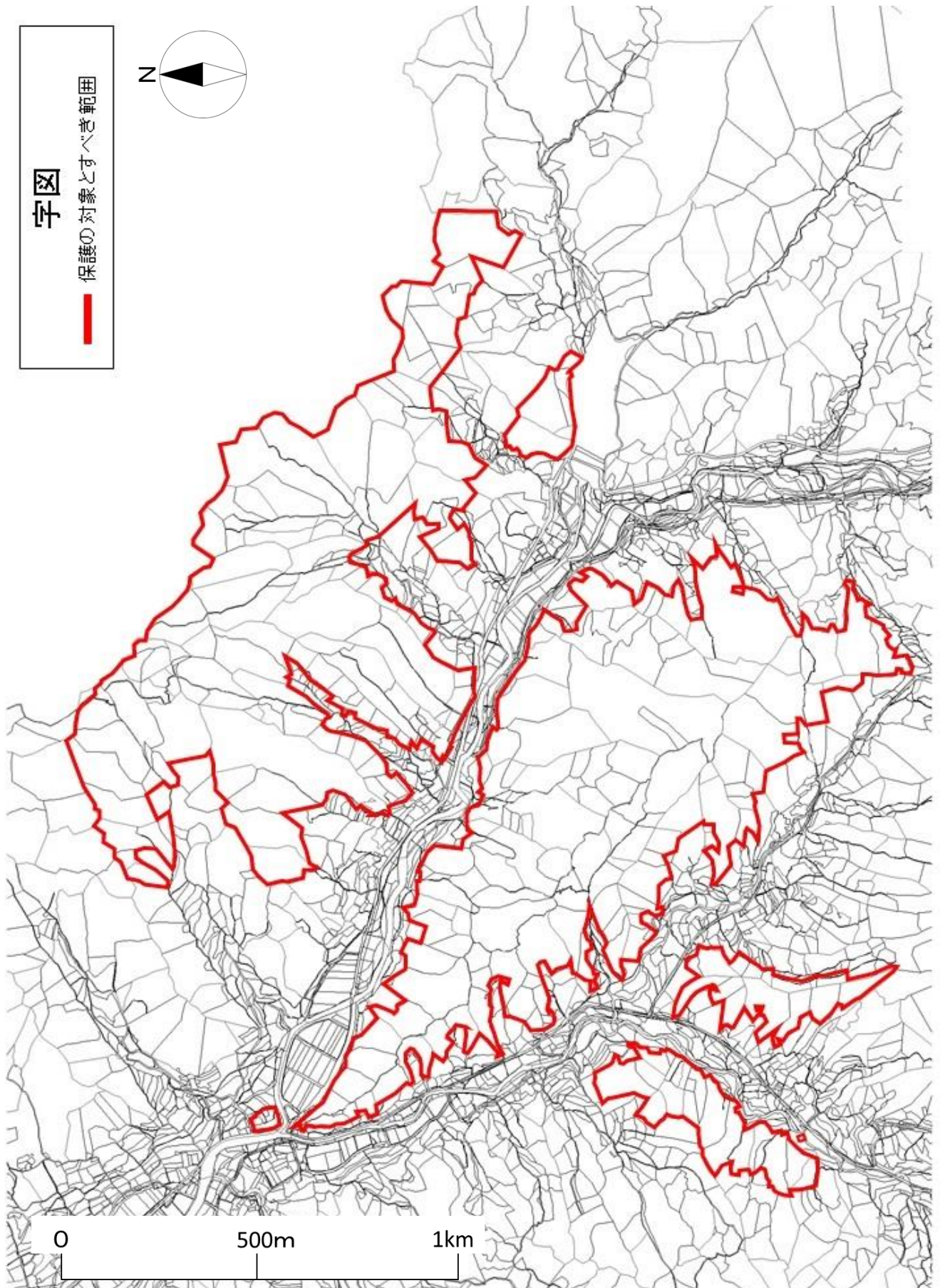
⑤中山仙境（夷谷） 範囲図



⑥瀬戸内海国立公園範囲・国東半島県立公園範囲図（該当地区抜粋）

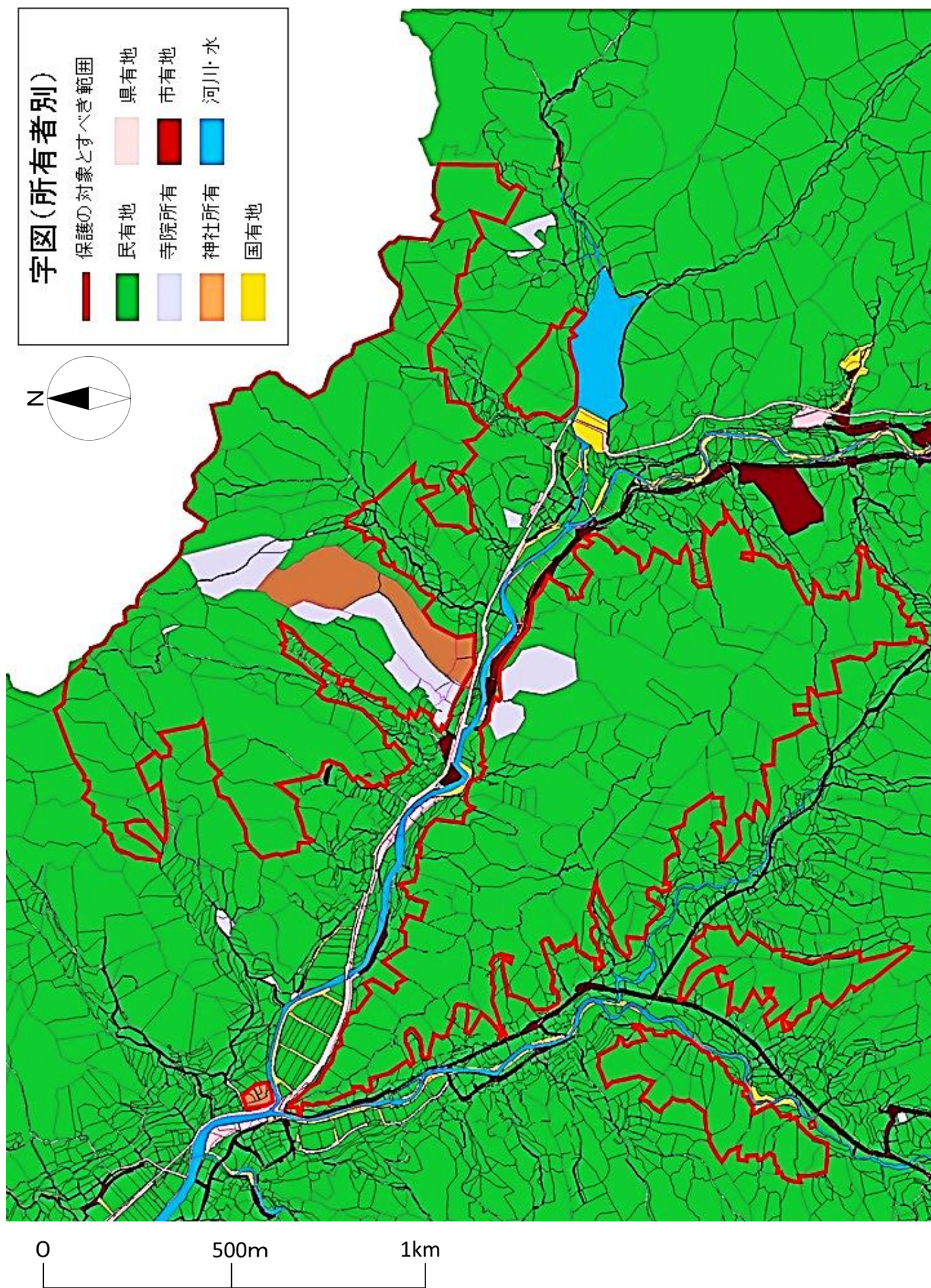


⑦字図

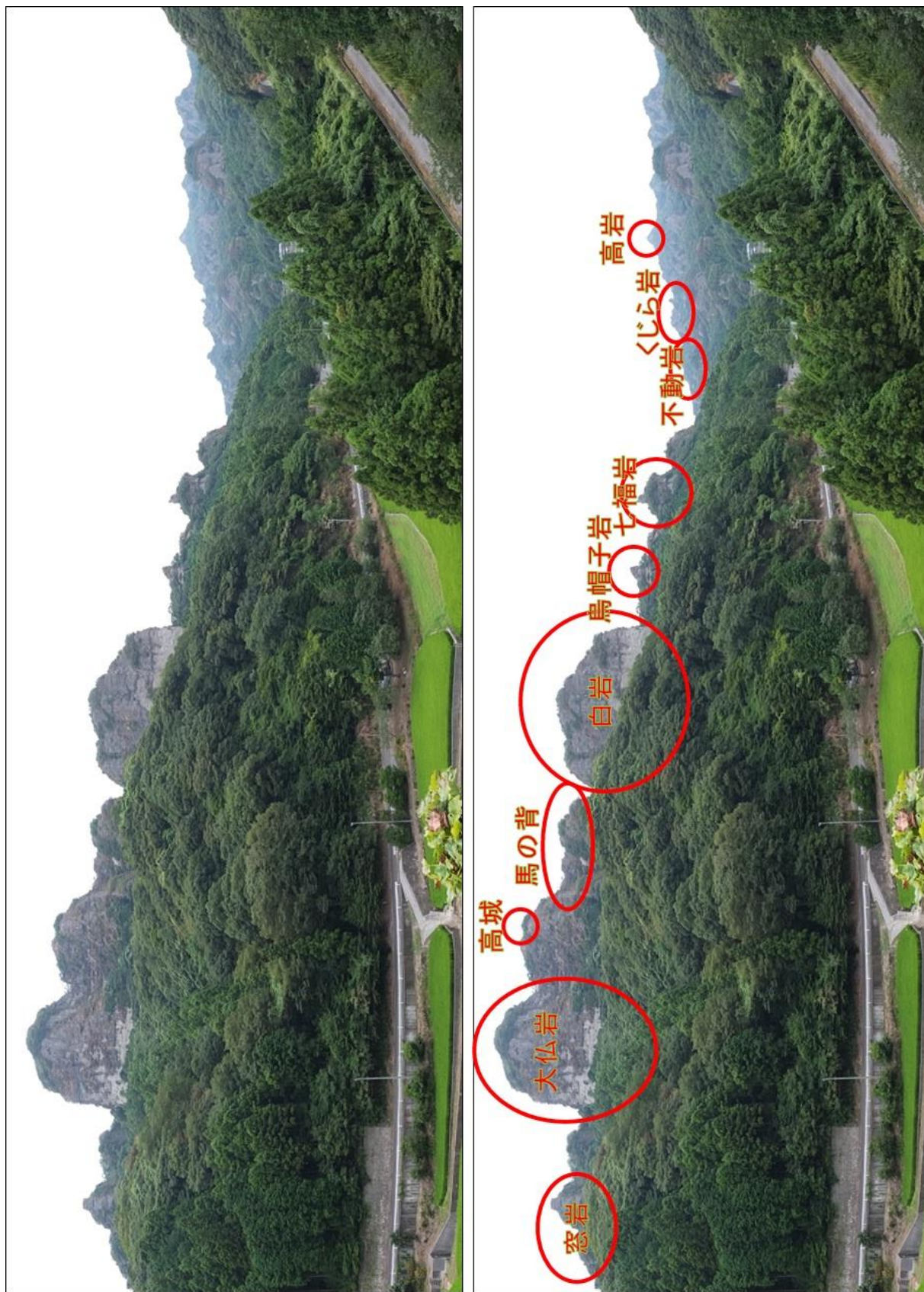




⑧字図 (所有者別)



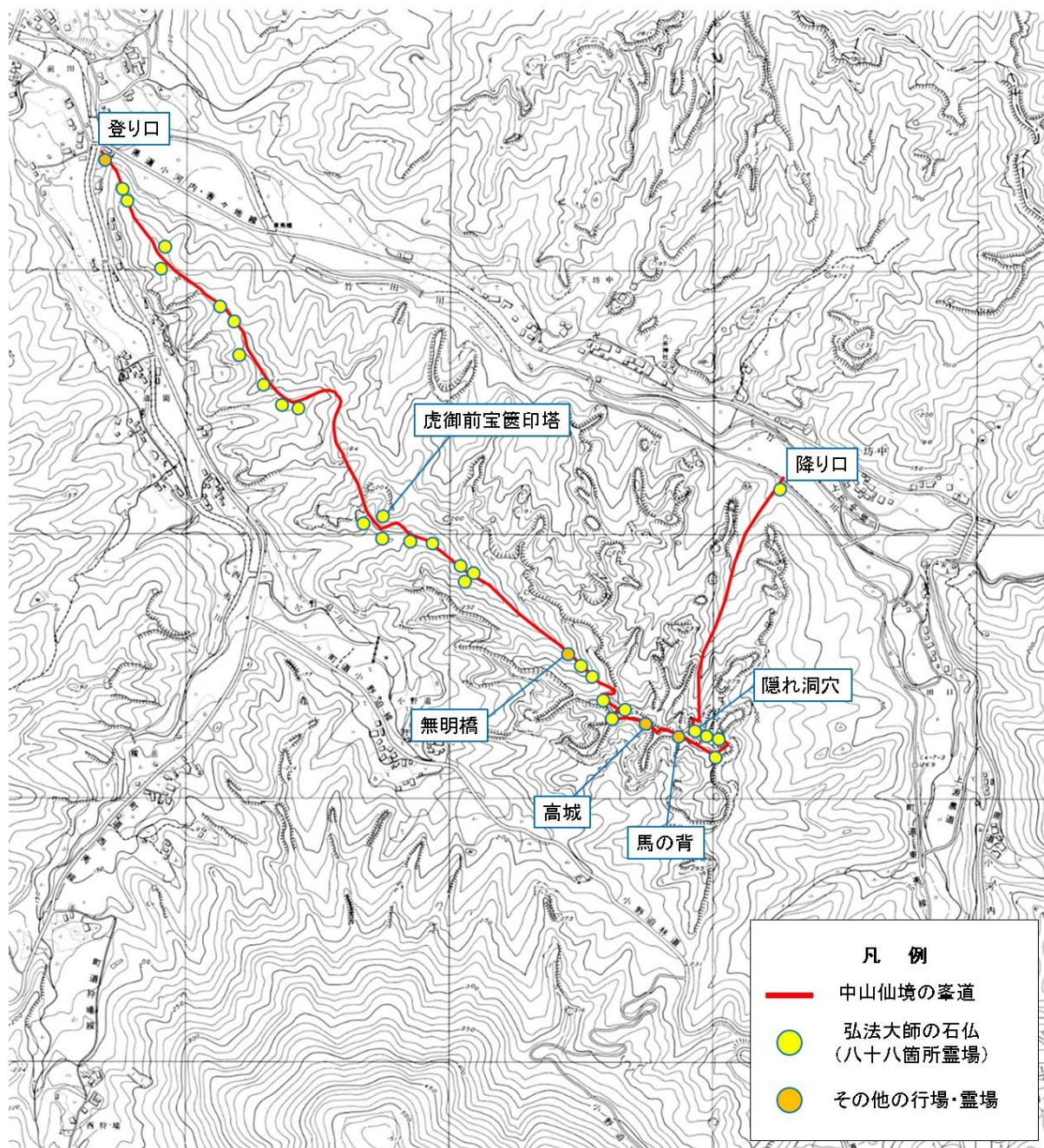
⑨一路一景公園から見た岩の名称を示す図



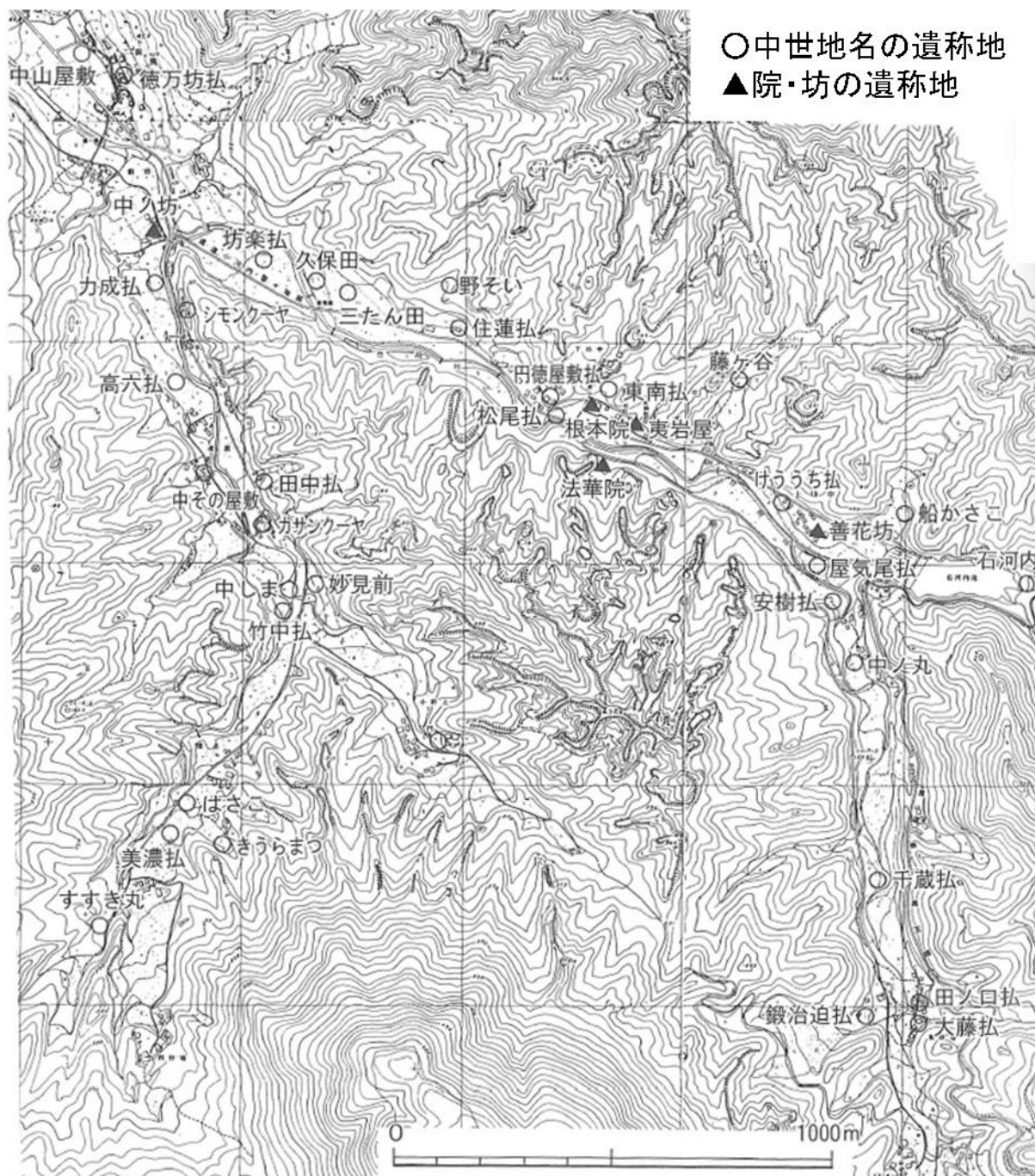




⑫中山仙境 峯道及び岩屋・霊場位置図

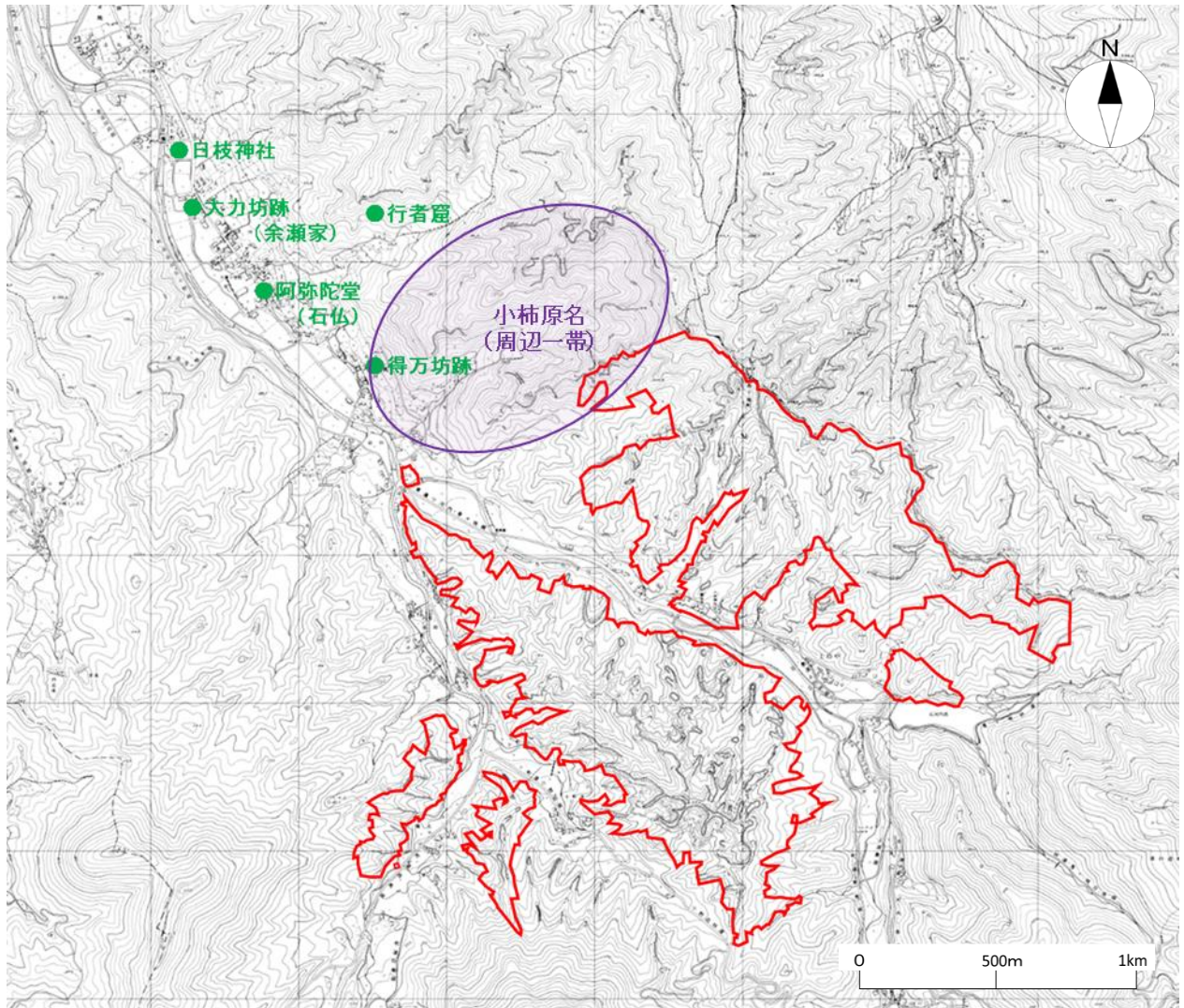


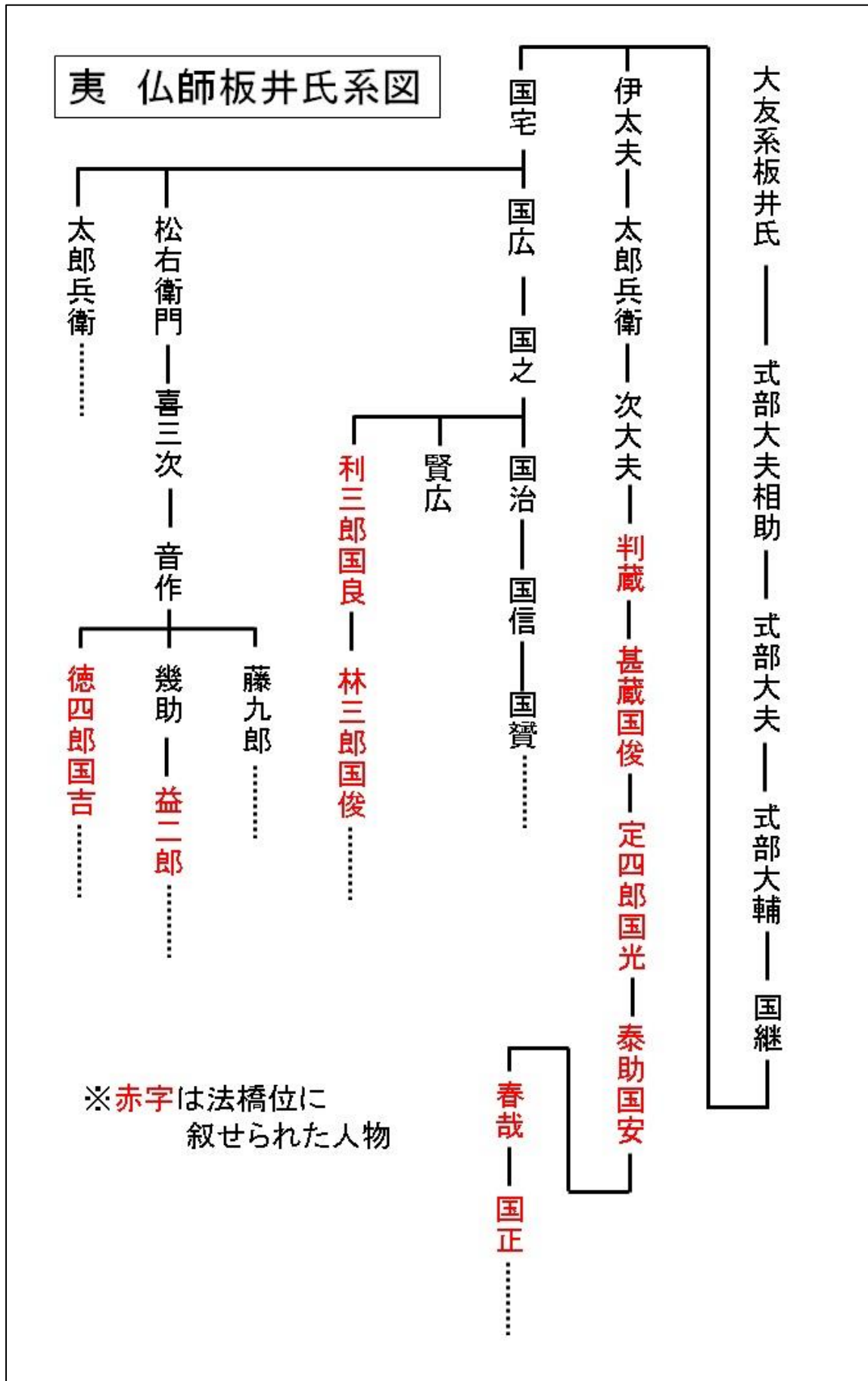
⑬夷地区・中世地名位置図



(大分県立歴史博物館『豊後国香々地荘の調査』より)

⑭周辺地域の関連文化財・地名







⑩中山仙境（夷耶馬）に関する文献等

○夷住僧行源解状案（余瀬文書）

（全文）

一 六郷御山夷住僧行源解 申請 満山大衆御署判事、

請被殊蒙鴻恩、任開発理、賜 御判、為後代証驗、令請継弟子同法等、致其無 勤給年来私領田畠等子細状、

在六郷御山夷石屋下津留字小柿原、

四至〈東限山、南耆闍谷／西限山、北限樂善房中垣〉

右、彼石屋砌者、本大魔所天、大小樹林繁、所絶人跡也、而行源以先年之比、始罷籠件石屋之間、時々励微力天、切掃所在樹木、崛却石木根、開発田畠之後、至于今日、全無他妨、所耕作来也、依之、於所当地利者、偏致毎年修正月之勤、以殘物者、助己身命、既經年序也者、任開発之理、賜御判、為擬後代証驗、注子細以解、

長承四年三月廿一日 僧行源

件田畠者、本行源往古開発私領也、仍全無他妨、令耕作之旨、尤尤明白也者、加署判、

本山住僧 五人

大先達大法師在判三人

屋山 長岩屋住僧在判三人 先達大法師在判

黒土石屋 住僧 先達大法師在一

四王石屋 住僧在一 々々

小石屋住僧 三人 先達大法一

大石屋住僧在二人 先達々々

夷石屋住僧在判六人 千燈石屋 住僧五人

先達二人

○六郷山本中末寺次第并四至等注文案

（前略）

一 夷山〈付長小野〉 扨々料田畠山野等四至以下、

院主相伝証文仁明白也、

（中略）

一 今夷 焼尾岩屋〈夷山末寺也〉

（中略）

一 願成寺夷山末寺〈限東美尾、限西笈立松／限南永小野、限北久保大道〉

委院主相伝証文仁分明也、

（後略）

○種定夷山小墻原名四至証状

（全文）

（花押）

豊後国無動寺領六郷夷山小墻原名田畠山野荒野等之事、

四至

東〈小山神ヲ限、大石坂ノ下ノ尾立ヲ限、とうミやう坂ノ〉

南〈雁俣嶽ノ東ノはなを限、横岳越ノ大仕ヲ限谷分ノ屋し畠ノ谷ヲ下ニとをし、樋ノ口の一せまち越大ノ田ヲ限、〉

西〈うちか畑ノ下ノ平半分上ヲ限、上ハぬかり場ノ尾立ヲ限ノ又ぬかり場よりしたハ平半分ヲ限、上ハ尾立ヲ水走ヲ限、陣ノノ尾も水走、丸岩も水走、をむれも水走、雁俣ノ畠〉

北〈みめのかわちハ、小山神ノ屋しろの左ノ柱ヲ限、へとうの畠ヲ限ノゑらの山神ノ平三分二ヲ限、多々良ノ坂尻ノてしろ尾をノかきり、下ノへくろ岩ノ下ノ尾立ヲ限〉

中山〈多々羅ノ本ノ横塚ヲ限、式百手下ノあらてをかきり、たりかとハノ坂尻ハ谷ヲ限、谷尻下ニ向也〉

右之領地者、某重代相伝、無相違私領也、而彼名田一切散在仕候之处、 御公領ニ罷成候て、永正肆年 依致忠節、眞光寺以取次、 御屋形義長様、被成下御判御奉書候、至于今子々孫々、有違乱之方者、以此証文可致沙汰、自然彼在所、掠他名有混乱之方者、以此亀鏡、可注記者也、仍為後日状、如件、

永正肆年十二月十三日 種貞（花押）

○別當并院主分田町坪付注文（余瀬文書）

□□別當分田町之事、

□□五段半政所坊 一所四段禪坊払 一所三段徳万坊払

一所二段田ノ口払（新坊北政所坊） 一所三段住蓮払（圓実） 一所三大定払（カチとう二郎）

一所五段阿連払（七郎さへもん） 一所二段森下払（政所坊） 一所二段香祐払（政所坊）

一所二段大藤払（政所坊新坊継孫六） 一所二段壽禮田払（野田頼九郎） 一所二段學乗払

一所二段鍛冶迫払（政所坊新坊継） 一所二段安文払（カチ又四郎） 一所二段迫シリ払（小野二郎三郎）

一所二段小野払（二郎三郎） 一所二段圓徳屋敷払（二郎五郎） 一所二段竹中払（政所坊）

一うき西在所 一段ほり田作（御用作） 一段わり不氣（政所坊よこたけ）

一段あないのはさ（政所坊の田内蔵） 一段野そい徳乗 同一段のそい（カチ又六）

一段坊樂田山臥田（政所坊） 一段房樂田（うきめん野田内蔵） 中山田一段しゃけ田（カチ新四郎）

同一段神前（徳大坊大工五郎さへもん） 同一段中しま（大工五郎さへもん） 同一段はさこ（政所坊役田）

同一段口より（政所坊） 同一段こうはい田（政所坊） 同一段神前（政所坊）

同一段カミきり（馬五郎） 一段小々田良實（しうり田） 一段かねはたけ（かちとう二郎）

一段門（用作助太郎） 一所下堂その（政所坊） 一段ナリ くほ田一段孫六同一段（大工大七郎さへ門）

一所藤か谷（政所坊） 一所船かさこ（政所坊まうとふん） 一所中その屋敷（政所坊まうと分）

中山田二百分（うきめん三月三日上分） 一所一段西前（七郎さへもん） つかそい一段（政所坊 中山田）

中山屋敷二百分（助太郎） 中山田一段（政所坊） ゆやの本半（大工五郎さへもん）

〈コウヤノマエ〉大助太郎 一所東南払（政所坊まうと分） 一御ゆ田一段乗一免（坊樂田）

一所二段大力成払（大工五郎さへもん） 一御供田分一段教圓 同一段善吉

夷山院主分田町之事、

一所三段小妙鏡坊払（カチ又四郎） 一所三段長本払（野田藤九郎） 一所六段観行払（政所坊）

一所五段美濃払（政所坊） 一所三段都甲露払（同高五十分有新六） 一所三段下力成払（政所坊）

一所二段千蔵払（新二郎） 一所二段安樹払（藤二郎） 一所二段坊樂払（小二郎）

一所三段松尾払（陽恩坊） 一所一段代その（御用作 徳万河内） 二段屋気尾払（カチ又四郎）

一段堂ノ前（圓實） 一段房樂田（カチ又四郎うきめん） 一段美濃払（内政所坊 五原二斗小二郎）

一中ノ丸（かち又四郎 三斗） 地藏道前半（政所坊） 一段房樂田（神もと）

〈小久ほ〉中堂一段（うきめん） 〈三田ノ内〉二段（政所坊） 〈当所〉一段半（政所坊 真如院）

〈坊樂田〉一段良實（山臥田） 〈ヨコタチカわより〉二百分（せんたふ） 〈一段房樂田 大工〉

一熊野寺院主分 一緒三段田中払 一所二段けうウチ払（迫二郎）

一所二段高六払（此東専道合三段） 〈一所二段圓祐払院主職専道〉

一夷山仏神事御料田 権現御供田二段、同正月朔日同御檀供田三段、同酒拝二段、同饗料田三段、同二月耆闍岩御檀田三段、同酒拝大、同五日松尾岩座御檀供田三段、同饗料田三段、同六日鬼会御檀供田九段、同饗料田三段、二月権現御供田二段、同饗料田三段、九月九日御供田三段、十月廿一日大般若会田二町、十一月権現御供田二段、同饗料田三段、十二月十五日常行三昧田九段、同廿四日大師会田三段、浄油三段、六供経田一町八段、大定払阿弥堂御檀供田一段

○吉弘統幸願文（靈仙寺文書）

敬白 立申大願之事 源統幸志之、

一 可奉勤仕当山如往古七堂建立之事、付可  
専仏事祭日並勤行、

一 可奉勤仕満山共不違昔岸造立之事、付月  
次諸法事長日勤不可怠慢、

右、当山之靈嶺者、元正天王之御宇養老二年  
（戊午）仁聞菩薩開闢以來、練行季久、異国  
幸福之壇場、天地長久御願所也、六所権現者、  
南方元后世界之教主入重玄門大士、太郎天童  
者、大日覺王之後身、惡魔降伏不動明王之靈  
驗、八幡大菩薩者、満山開基之尊主、日域朝  
遅之本主、累聖明君之曩祖也、為守宝祚、為  
蒼生利頭三身之金容批三所和光之権靡給然、  
而源統幸忝請叡岳座主之尊名、被補任当山権  
別当、成一山之法務、雖然今代者、随而国司  
命、改法体、苟生弓馬家、任運於天身於投国  
家、欲退彼暴惡肆、満山之仏神三宝、頓頭合  
掌致精誠之立願、奉祈冥加、加然鏤莊嚴七宝、  
磨光耀鸞鐘以珠玉奉飭仏閣法僧常住乎、无勤  
行倦優、御宝前嗚呼染随喜感応肝渴仰深、因  
茲含神慮納受咲衆災弘千里之外、就中親君臣  
之礼儀不失忠孝志、別者掠傍輩企非分證訴以  
惡口訴諸人者、若人惡罵口則閉塞之仏説不忌  
即時討證人、給要出軍則如衆星中月光、於増  
戰場呈名譽我朝鎮他之領地知行仰願者、子孫  
繁盛乎、練統之開榮華、松柏之景迎万春不頓  
志、至神鑒在暗馮裁悦裁伏願者、冥頭加威靈  
神合力、難於退四方精誠叶冥慮齒玄、可成加  
護者先一之現瑞相給而已、

天正十五年丁亥正月廿八日

源統幸 敬白

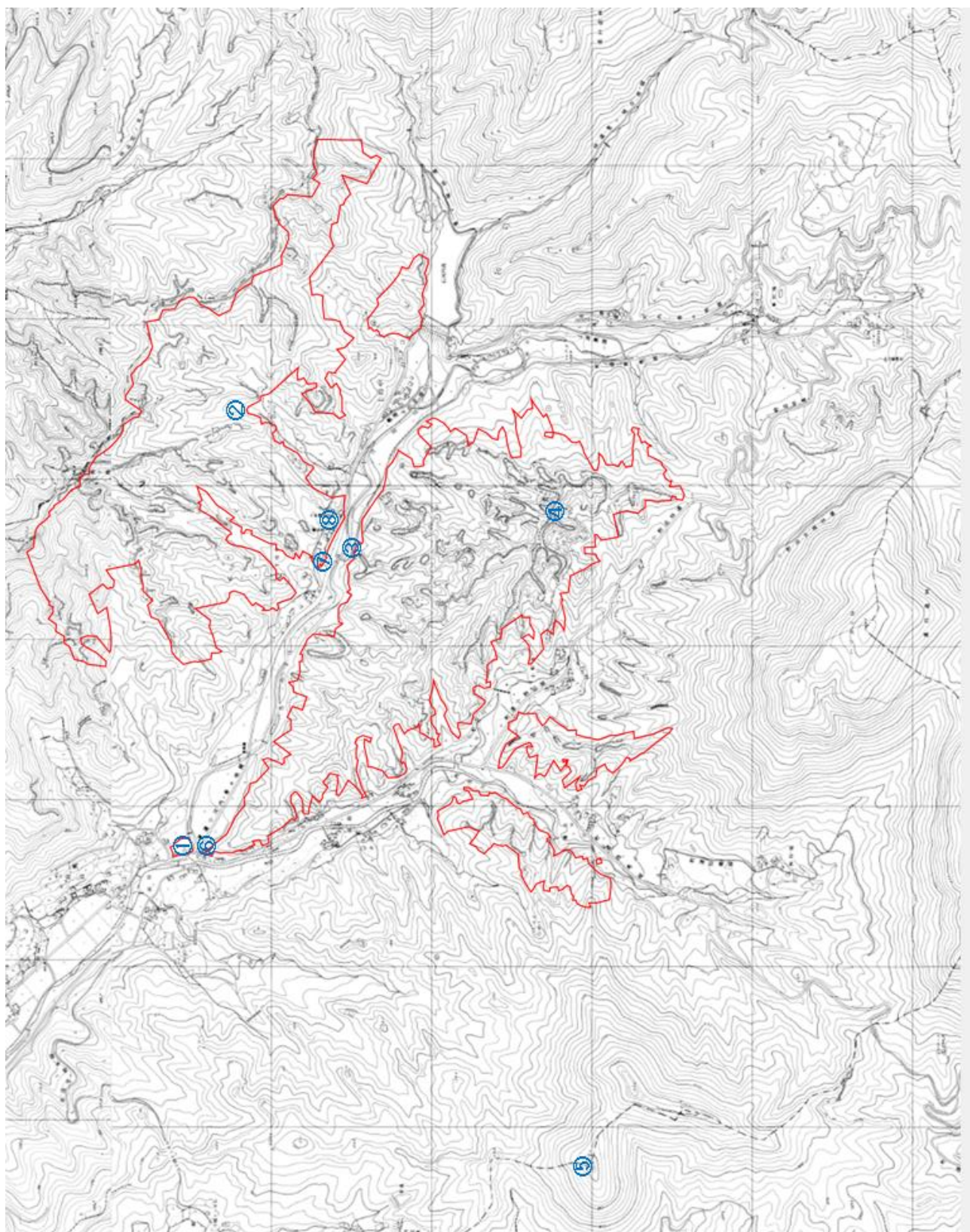
○西国東郡誌

第三十節 夷谿の仙境 三重村

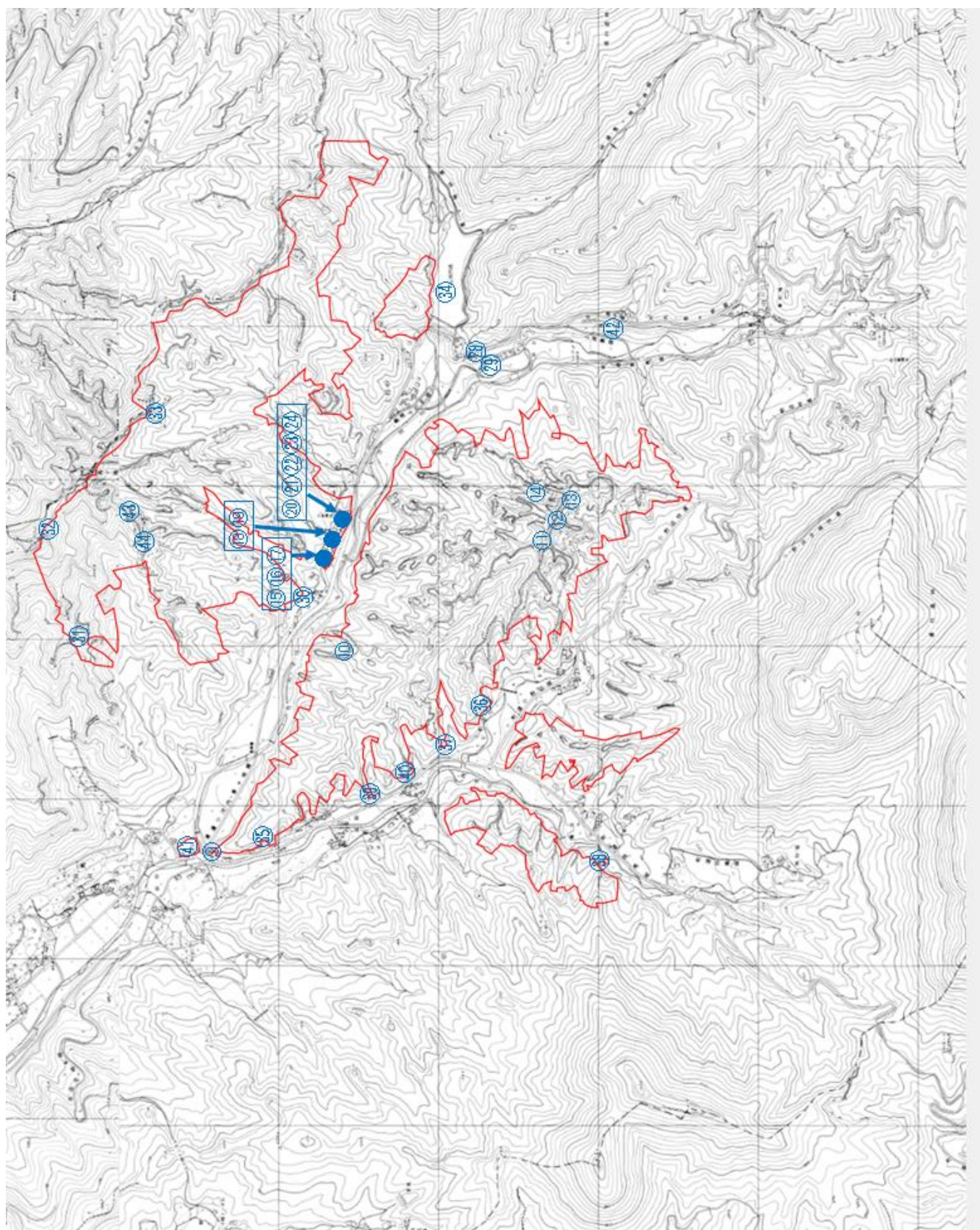
夷谿の仙境は、三重村字夷に在り（此地往  
古より少彦名神の鎮座あり、即ち村名の由り  
て来たる所にして、舊エビスは蛭子の文字を  
用ゐたるに、何の比よりか夷の字に更むと云

ふ）。三重村役場前より、村落の間を進むこと  
數十歩、忽ち一水の南より来たるに遇ふ。之  
を夷川と云ふ。源を狩場の山間に發し、北流  
阪口に至り、香々地町堺に注ぐ。即ち竹田川  
の上流なり。頭を擧げて前路を望めば、青巒  
疊々として高く雲際に聳ゆるを觀る。是れ其  
前峰は薑山にして、左に屹立するを黒木山と  
し、右に聳ゆるを尻突山とす。尻突の右方、  
別に一峰の時立するもの、頂上平らかにして  
山容酷た富士に似たり。名けて之を大平山と  
呼び、一に稱して前田富士と云ふ。谿流に沿  
ひて行くこと半里許、山峽漸く迫り、水色益  
す清し。己にして一石梁に達す其製圓凸車輪  
の如く呼びて車橋と名く。是れ仙境に入るの  
門口なり。薑の山脈客々兩派と爲り、北走す  
るもの約三十町、谿澗曲折水淙々として其中  
間を流るゝもの、之を夷谿とす。一路谿澗に  
沿ひて通す。行くこと數十歩山容樹色已に凡  
ならざるを觀る。輕鞋愈よ進めば奇趣愈よ加  
ふ。左は削壁天を刺して蒼苔皺眉を封じ、山  
樹鬱葦翠滴らんとし、右は谿水を隔てゝ無數  
の奇巖磊々碧落に聳峙したるもの、高低參差  
布配配合の絶妙。巨靈手づから泰山を劈き、  
神匠を凝らして羅列したるに異らず。頼山陽  
を九泉に起して、此景に對せしめんか、謂は  
ざりき。海内尚此勝在り、前豊耶馬の夷谿に  
於ける、猶ほ妙義の耶馬に於けるが如しと、  
辯疏せんや知る可きなり（頼山陽、弱冠の時、  
東遊妙義山に登り、其景勝を觀て無雙と爲す。  
後山國川の溪間を経て、其絶景に驚き、妙義  
の如きは幾十峰あるを知らず。山國谿こそ海  
内第一と謂ふも誣ひざるなりと云へりき）時、  
三春天暮れて、百花地に委し、新緑空に漲つ  
て杜鵑雲間に叫ぶの候に屬す。

現況写真1 (夷谷八景)

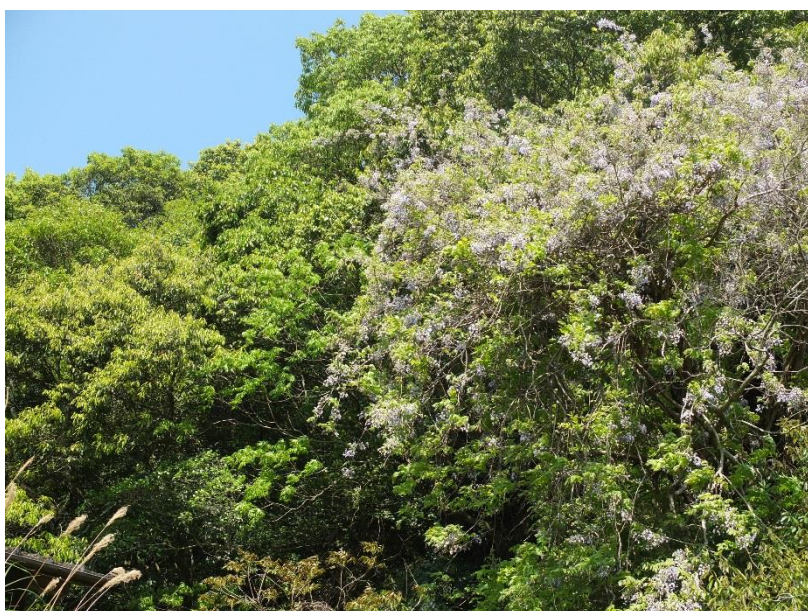


現況写真 2 (構成要素の現況)

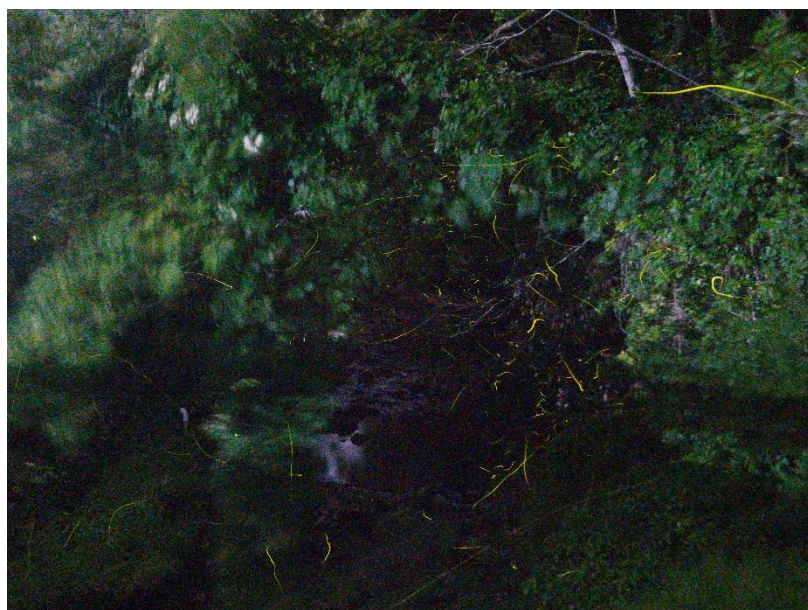




現況写真 1  
夷谷八景「楽庭櫻花」



現況写真 2  
夷谷八景「藤谷藤花」



現況写真 3  
夷谷八景「夷川螢火」



現況写真 4  
夷谷八景「高城秋月」



現況写真 5  
夷谷八景「大平峯雪」  
大平遠景



現況写真 6  
夷谷八景「車橋夜雨」  
(平治橋親柱)



現況写真7  
夷谷八景「霊仙晩鐘」



現況写真8  
夷谷八景「六所宮燈」



現況写真9  
中山仙境登り口





現況写真 10  
虎御前宝篋印塔



現況写真 11  
無明橋



現況写真 12  
高城





現況写真 13  
馬の背



現況写真 14  
隠れ洞穴



現況写真 15  
霊仙寺



現況写真 16  
靈仙寺梵鐘



現況写真 17  
靈仙寺一石地藏尊



現況写真 18  
実相院



現況写真 19  
実相院国東塔



現況写真 20  
六所神社



現況写真 21  
六所神社磨崖像



現況写真 22  
六所神社夷社



現況写真 23  
六所神社奥ノ院



現況写真 24  
講堂礎石跡



現況写真 25  
霊仙寺旧墓地



現況写真 26  
兄弟割石（東夷）



現況写真 27  
今夷社



現況写真 28  
焼尾阿弥陀堂



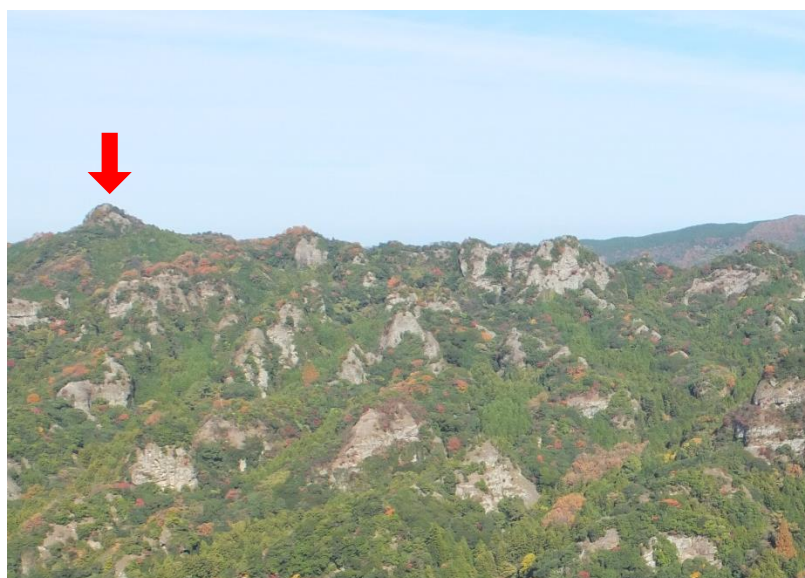
現況写真 29  
焼尾塔ノ本国東塔



現況写真 30  
坊中岩屋



現況写真 31  
祇舎不動



現況写真 32  
高岩



現況写真 33  
一望岩





現況写真 34  
石河内溜池



現況写真 35  
線彫板碑（道園）



現況写真 36  
梅ノ木磨崖仏



現況写真 37  
明峴宮



現況写真 38  
兄弟割石（西夷）



現況写真 39  
猿田彦大神画像庚申塔



現況写真 40  
板井春哉石像



現況写真 41  
楽庭神社



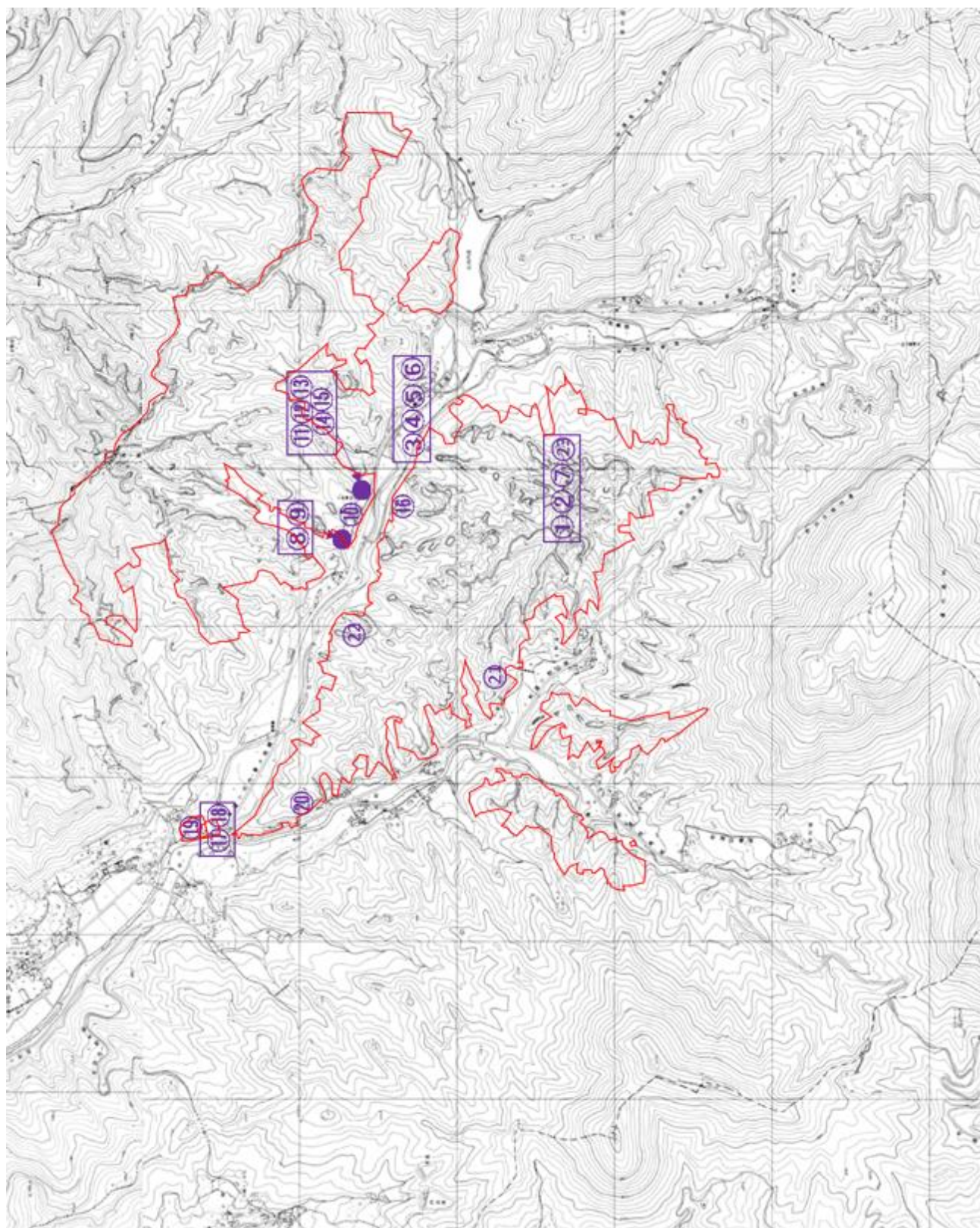
現況写真 42  
一路一景公園



現況写真 43  
くじら岩



現況写真 44  
不動岩



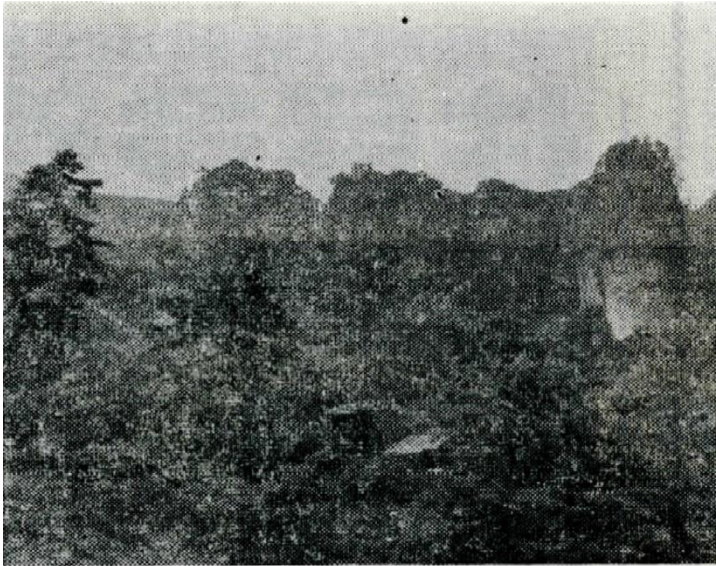
三 重 村 中 山 の 仙 境



古写真1

三重村中山の仙境（大正時代）

『西国東郡誌』より

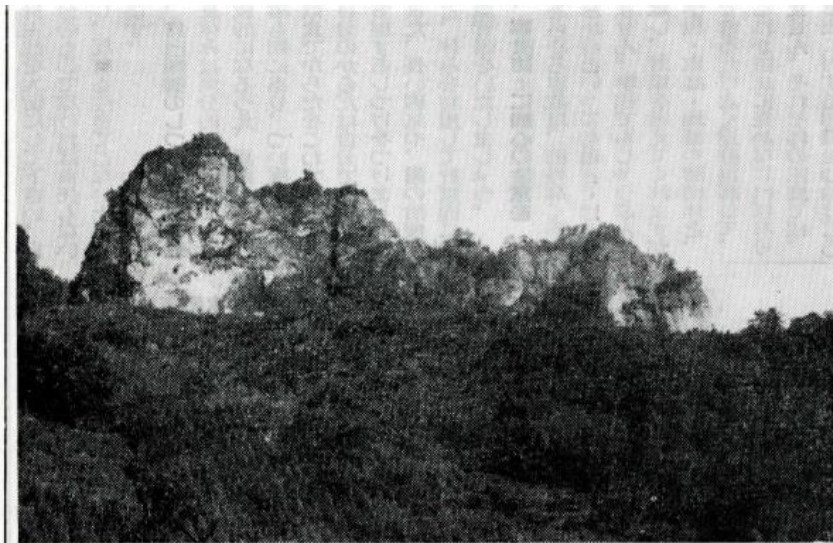


国立公園夷谷の一部

古写真2

国立公園夷谷の一部

広報かかち昭和40年7月号



涼線を求めて

古写真3

涼線を求めて

広報かかち昭和44年7月号



山 里 の 春 (国立公園 夷谷)

古写真 4

春の里山

広報かかぢ昭和 44 年 1 月号



積雪に覆われた国東地方

古写真 5

積雪に覆われた国東

広報かかぢ昭和 45 年 2 月号



深まりゆくこがねの秋

古写真 6

深まりゆくこがねの秋

広報かかぢ昭和 45 年 11 月号



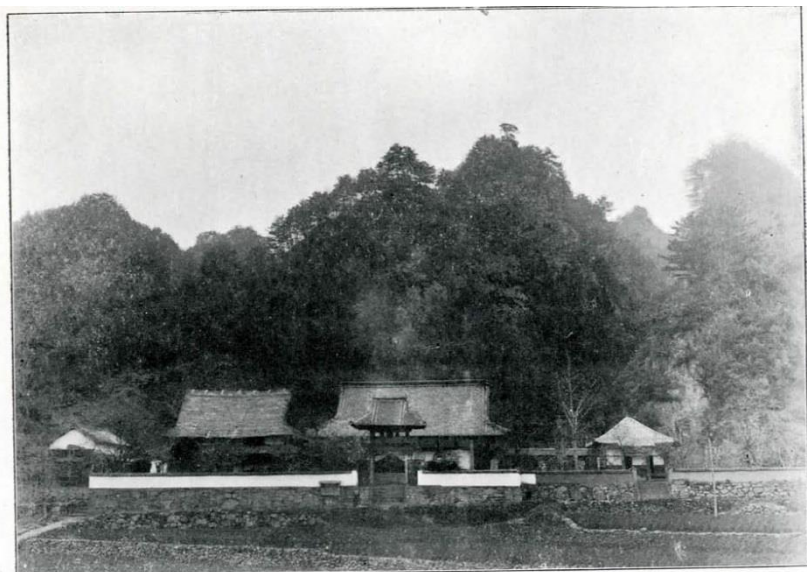
夷中山仙峽の夜明け

古写真7  
夷中山仙峽の夜明け  
広報かかぢ昭和47年1月号



寺 泉 靈

古写真8  
靈仙寺（大正時代）  
『西国東郡誌』より



（意注に佛石大一の方右てつ向）景全寺仙靈夷

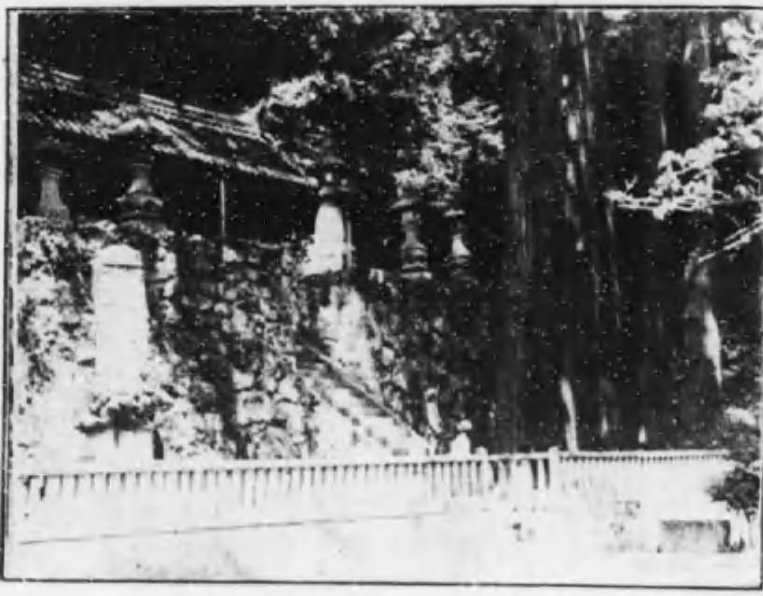
古写真9  
夷靈仙寺遠景（昭和初期）  
『三重郷土誌』より





(社所六は右てつ向)景全院相實夷

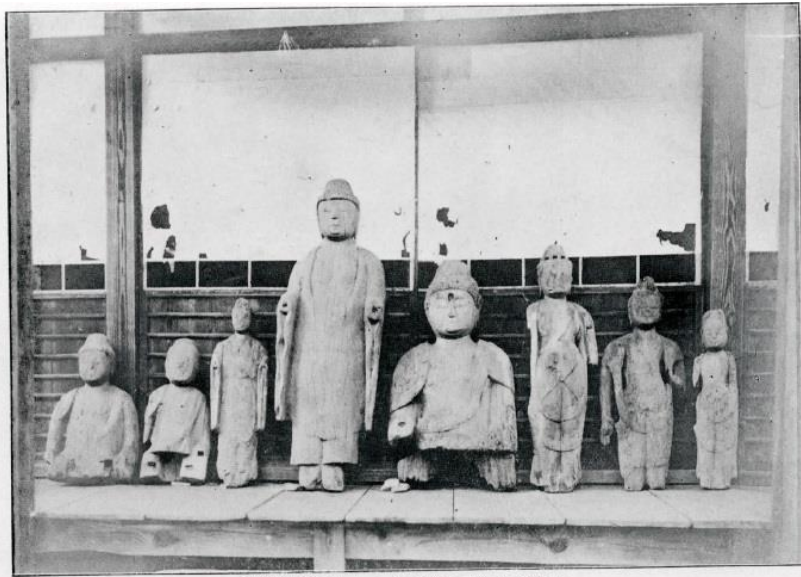
古写真 10  
夷実相院全景（昭和初期）  
『三重郷土誌』より



古写真 11  
三重村六所神社（大正時代）  
『西国東郡誌』より



古写真 12  
夷六所神社全景（昭和初期）  
『三重郷土誌』より



(代時原藤) 佛木の堂音観内境社神所六

古写真 13

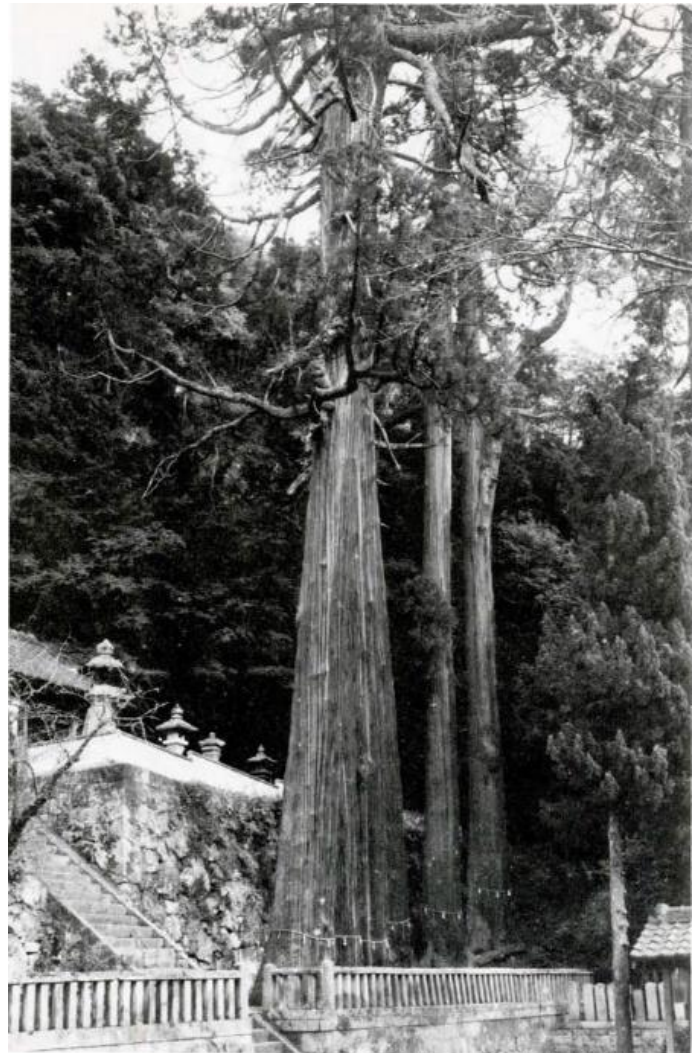
六所神社境内観音堂の木仏  
『三重郷土誌』より



古写真 14

杉下に踊る

広報かかぢ昭和 40 年 9 月号



古写真 15

六本杉 (昭和後期)

『六本杉』より

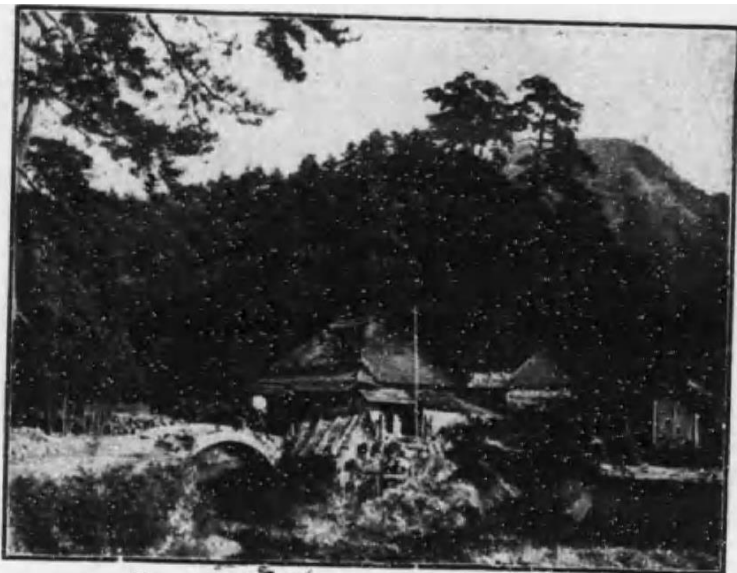


照參眞寫の頁二十三(1) 群塔の石割中坊夷

古写真 16

夷坊中割石の塔群(昭和初期)

『三重郷土誌』より



景の橋車庭樂村重三

古写真 17

三重村樂庭車橋の景(大正時代)

『西国東郡誌』より



古写真 18

平治橋 (昭和末期)

『大分の石橋探訪』より



古写真 19  
千年杉（昭和後期）  
『六本杉』より



塔印籠法並(面岩巨大方左てつ向)群碑板彫線

古写真 20  
線彫板碑群並宝篋印塔（昭和初期）  
『三重郷土誌』より



西夷梅の木の線彫板碑及陽刻五輪群

古写真 21  
西夷梅ノ木線彫板碑及陽刻  
五輪塔群（昭和初期）  
『三重郷土誌』より



(意注に修石の近附部底) 塔院法の前御虎山中

古写真 22

中山虎御前の宝篋印塔(昭和初期)

『三重郷土誌』より

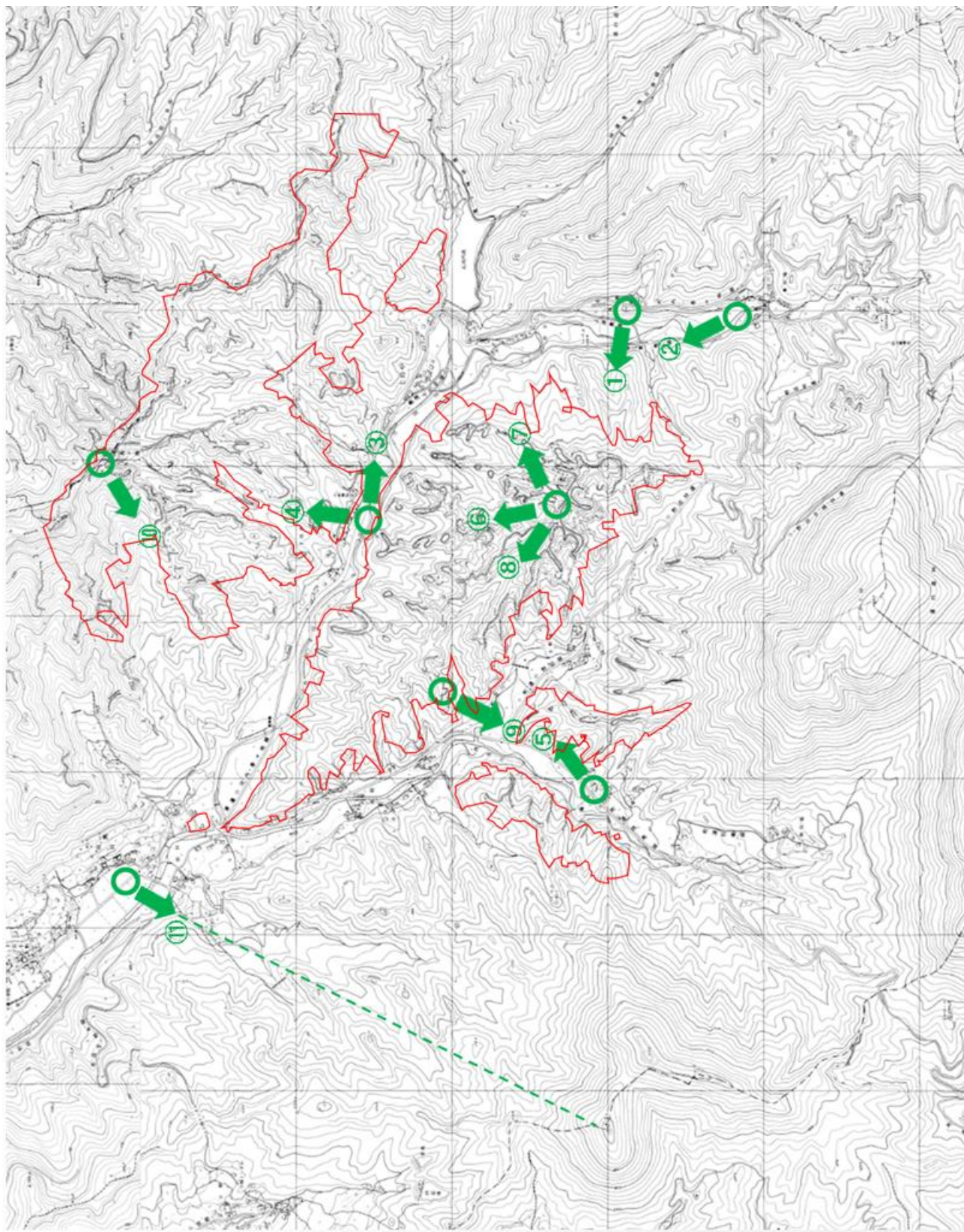


仙峡よりの眺めは格別、あすこが……

古写真 23

仙境よりの眺めは格別

広報かかち昭和 49 年 1 月号





周辺写真 1  
一路一景公園より



周辺写真 2  
夷谷温泉より



周辺写真 3  
霊仙寺より上手



周辺写真4  
霊仙寺裏手  
(ドローンによる/  
『文化庁報告書』より)



周辺写真5  
西夷より



周辺写真6  
高城附近より1





周辺写真7  
高城附近より2



周辺写真8  
高城附近より3



周辺写真9  
中山仙境より西夷を見下ろす



周辺写真 10  
高岩より



周辺写真 11  
大平（前田富士）

## 中山仙境（夷谷） 名勝調査報告書

発行日：平成29年12月13日

発行者：豊後高田市教育委員会

〒872-1101

大分県豊後高田市中真玉 2144-12

TEL:0978-53-5112

